

## 『共産党宣言』最初の英訳をめぐる諸問題

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 橋本, 直樹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10232/20141">http://hdl.handle.net/10232/20141</a>

## 【論 説】

# 『共産党宣言』最初の英訳をめぐる諸問題<sup>1</sup>

橋 本 直 樹

## 目 次

は じ め に

I 英訳者ヘレン・マクファーレンについて

1. マクファーレンに関する一次資料

(1) ヘレン・マクファーレン執筆の論説1点

(2) 1850年12月19日付エンゲルス宛イエニー・マルクスの手紙

(3) 1851年2月23日付エンゲルス宛カール・マルクスの手紙

2. マクファーレンの伝記的事実についての従来の研究と調査結果

(1) ショイエンおよびその後のチャーティスト研究における成果

(2) 『ハーニー・ベイパーズ』(1969年)収録のハーニーの手紙

1) 1850年12月29日付マルクス宛ジョージ・ジュリアン・ハーニーの手紙

2) 1850年12月16日付エンゲルス宛ジョージ・ジュリアン・ハーニーの手紙

(3) デイヴィッド・ブラック『ヘレン・マクファーレン』(2004年)における調査結果

3. ブラック, ヨウマンおよびスペンサーによる最新の調査結果(2012年)

(1) マクファーレンの幼少期と家業の破産

(2) 南アフリカへの移住

(3) 帰国とその後

4. 小 括

II いずれも存在しないハーニーの手紙とアンドレアス論文

1. ハーニーの手紙についてのデ・ヨンクの情報

2. アンドレアス著「ヘレン・マクファーレン」論文

3. いずれも存在しないハーニーの手紙とアンドレアス論文

III 『共産党宣言』起草者名の公表の先後関係について

1. 問題の意味——黒滝正昭氏の問題提起

2. 『新ドイツ新聞』掲載のマルクス「声明」

(1) オットー・リューニングによる『新ライン新聞。政治経済評論』の書評

(2) マルクスの「声明」

(3) 小 括

3. 『レッド・リパブリカン』第20号の予告記事

4. 『レッド・リパブリカン』と『評論』との先後関係

(1) 『新ライン新聞。政治経済評論』第5／6合冊号

(2) 『レッド・リパブリカン』連載

IV マクファーレン訳の特徴

---

<sup>1</sup> (英文タイトル) Naoki HASHIMOTO, On the first English translation of the “*Communist Manifesto*”.  
(キーワード) 共産党宣言, マクファーレン, レッド・リパブリカン, マルクス, エンゲルス。

1. ハーニーによる〈まえがき〉について
  2. 段落数の減少について
  3. 本文の特徴
    - (1) 〔はしがき〕冒頭文「一つの妖怪がヨーロッパを歩き回っている」について
    - (2) 本文冒頭文「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」について
      - 1) マクファーレン訳の限度
      - 2) D. ブラックの錯誤
    - (3) 第Ⅲ章への三つの脚注の追加について
    - (4) 二三の訳語の特徴について
      - 1) 「党」の意味に相当する訳語
      - 2) 「搾取」の訳語は using up
      - 3) 「交易」の訳語
  4. 省略・削除された部分について
  - V マクファーレン/モートン問題の検討
    1. 「ほんものの『ハワード・モートン』」問題について
      - (1) ジョージ・ジョゼフ・マントル (George Joseph Mantle) の手紙
      - (2) 「ほんものの『ハワード・モートン』」——従来の理解——
      - (3) 「ほんものの『ハワード・モートン』」についての本稿の理解
    2. マクファーレン/モートン問題について
      - (1) クーニナの見方：従來說 (ハワード・モートンはヘレン・マクファーレンの筆名である)
      - (2) D. ブラックの見方：1850年半ばにマクファーレンはバーンリーに転居した
    3. マルクスによるマクファーレン評価の観点からの吟味
  - VI マクファーレン訳へのエンゲルスの関与
    1. クーニナらの従來說
    2. シュテークリによる従來說批判
    3. エンゲルスの関与について
  - VII マクファーレン訳の影響
- お わ り に

## は じ め に

本稿でもっぱら検討の対象とするのは、チャーティスト左派のジョージ・ジュリアン・ハーニーの編集する週刊紙『レッド・リパブリカン (The Red Republican)』上で1850年11月に掲載された『共産党宣言』最初の英訳である。その〈まえがき〉<sup>2)</sup>において、『宣言』の起草者がカール・マルクスおよびフリードリヒ・エンゲルスであることが、その英語読みで「チャールズ・マークスおよびフレデリック・エンゲルス」と明らかにされた。この英訳については、英訳者であるヘレン・マクファーレン (Helen Macfarlane) の伝記的事実が従来ほとんど不明であったこと、英訳掲載の折の〈まえがき〉における起草者名の公表と『新ライン新聞。政治経済評論』第5・6号合冊での『宣言』第Ⅲ章の部分再録時の編集者脚注における著者名公表との先後関係についての議論、『レッド・

---

<sup>2)</sup> 『共産党宣言』英訳本文に先立って紹介の一文が置かれていた。本稿ではこれを〈まえがき〉と呼ぶ。

リパブリカン』のマクファーレン訳へのマルクスおよびエンゲルスの協力の度合い、マクファーレン訳の影響はどのようなものであったのか等、種々の問題があった<sup>3</sup>。本稿はこれらの諸問題について若干の考察を加えようとするものである。

## I 英訳者ヘレン・マクファーレンについて

### 1. マクファーレンに関する一次資料

『共産党宣言』のヘレン・マクファーレンによる最初の英訳が『レッド・リパブリカン』に、その最終号まで4回連載で公表されたのは1850年11月のことであった。1848年革命の退潮も明らかとなっていた時期である<sup>4</sup>。

しかしながら、その訳者の名がヘレン・マクファーレンであると初めて公表されたのは、『共産党宣言』1872年ドイツ語版の、おそらくエンゲルスによって執筆された「序言」においてであった<sup>5</sup>。

従来、「だが、訳者のヘレン・マクファーレン [Helen Macfarlane] については、ほとんどなにもわかっていない」状況であった<sup>6</sup>。

「わかって」いたことは、1850年のヘレン・マクファーレン執筆による『デモクラティック・レビュー (The Democratic Review)』の3回連載論説1点<sup>7</sup>と、そのほぼ80年後の1929年に公刊されたマルクスおよびその妻イエニーのそれぞれの手紙とから引き出される事柄だけであった。

#### (1) ヘレン・マクファーレン執筆の論説1点

まず、名義においてマクファーレン執筆の唯一の論説（3回連載）からは、彼女が、チャーティスト運動の賛同者であって、女性解放運動を主張していることが分かる。また、彼女がヘーゲルの

<sup>3</sup> 種々の問題についてはそれぞれ下記諸文献を参照されたい。マクファーレンの伝記的事実が従来ほとんど不明であったことについては、水田 洋「『共産党宣言』の英訳者『知の商人』1985年、筑摩書房、113-116頁（初出は筑摩書房の『経済学全集』第2版に付された「月報」とのことであるが、筆者未見）。著者名公表の先後関係については、黒滝正昭「服部文男氏による新訳『共産党宣言』について」『私の社会思想史』成文社、2009年、367頁、注(10)（初出は『季刊 科学と思想』77号、新日本出版社、1989年10月、257-259頁、注(4)）——特に、アンドレアスの見解（Bert Andréas, *Le Manifeste Communiste de Marx et Engels. Histoire et Bibliographie 1848-1918*, Milano 1963, p. 25）を参照している行論——。なお、『新ライン新聞。政治経済評論』を以下では『評論』とのみ略記することがある。英訳へのマルクスおよびエンゲルスの協力のいかんについては、拙稿「J. G. エッカリウス「ロンドンにおける仕立て業」とマルクス」〈マルクス・エンゲルス研究の新段階〉17（監修・服部文男）『経済』第246号、新日本出版社、1984年10月、223-227頁および拙稿「『共産党宣言』普及史研究の諸成果」『経済』第29号、新日本出版社、1998年2月、第1節第2項「『ザ・レッド・リパブリカン』に連載された最初の英訳へのエンゲルスの関与」を参照。

<sup>4</sup> この時期のマルクスおよびエンゲルスの活動およびその背景については、拙稿「恐慌と革命——1849/50年のマルクス・エンゲルスの活動と経済学研究——」服部文男・佐藤金三郎編『資本論体系 第1巻 資本論体系の成立』有斐閣、2000年12月、67-81頁を参照。

<sup>5</sup> 『共産党宣言』1872年ドイツ語版の「序言」がエンゲルスの執筆である根拠等、拙稿「『共産党宣言』1872年ドイツ語版の刊行経緯」鹿児島大学経済学会『経済学論集』第39号、1993年11月、57-76頁を参照。

<sup>6</sup> 水田、前掲書、113頁を参照。なお、[ ]内は橋本。

<sup>7</sup> Helen Macfarlane, Democracy. Remarks on the Times, apropos on certain passages in No. 1 of Thomas Carlyle's "Latter-Day Pamphlets.", *The Democratic Review*, April, 1850, pp. 422-425; May, 1850, pp. 449-453; June, 1850, pp. 11-20.

自由概念等、ドイツ観念論哲学についての素養を有しており、したがって、「ヨーロッパのいくつかの言語をとともよく使いこなす教養ある女性」であるということにもなる。さらに、寄稿論説の叙述を文字通り信用するならば、彼女がウィーン革命を実見したことが分かる。<sup>8</sup>

### (2) 1850年12月19日付エンゲルス宛イエニー・マルクスの手紙

次に、マルクス夫妻のそれぞれの手紙の関係個所である。

まず、マルクス夫人の手紙。

「カールに頼まれて『新ライン新聞』を6部あなたにお送りします。いくぶん具合のよくなったハーニーは、あなたに1部をヘレン・マクファーレンに送ってもらいたいといっています。』<sup>9</sup>

この手紙の上に引用した箇所からは、その後、マクファーレンとマルクスおよびエンゲルスとの関係がどのようなものであり、どの程度のものであったのか、つまり、共産主義者同盟の決定事項などが定期的に伝えられていたのか、また、英訳を作成する際にどの程度の協力があったのかといった問題が生じてくることになった。

### (3) 1851年2月23日付エンゲルス宛カール・マルクスの手紙

夫人の手紙のほぼ二ヵ月後に書かれたマルクスの手紙は次のよう。

「彼〔ジョージ・ジュリアン・ハーニー〕は二重の精神をもっている。フリードリヒ・エンゲルスが彼に吹きこんだものと、彼に固有のものだ。前者は彼にとって拘束服のようなものだ。後者は自然のままの彼自身だ。だが、もう一つ第三の精神、家の守り神が加わる。そして、それは彼の大切な女房だ。彼女はランドルフヤルイ・ブランのようなしゃれ者が大好きだ。彼女は僕を、たとえば彼女の「見張りの必要な財産」にとって危険になるおそれのある軽薄者だと言ってきらっている。……どんなにハーニーがこの守り神にとりつかれているかということ、またどんなに彼女が自分の陰謀において小スコットランド人的に抜け目がないかということについては、次のようなことから君にも推察できるだろう。君もおぼえているだろうが、彼女はおおみそかの晩にマクファーレンを僕の妻の面前で侮辱した。その後彼女は僕の妻に笑いながら話した、ハーニーはあの晩はとうとうマクファーレンに会わなかった、と。そのあとで彼女はハーニーに語った、自分がマクファーレンとの交際をことわったのは、仲間全体が、ことにまたマルクスの妻が、あの二股の男まさりのことをあきれもし笑いもしたからだ、と。ところが、ハーニーは頓馬で臆

<sup>8</sup> ウィーン革命を実見したであろうことが窺われる記述は、Macfarlane, *ibid.*, *The Democratic Review*, April, 1850, p. 424; ヘーゲル哲学を中心とするドイツ観念論哲学の素養を示す記述は、Macfarlane, *ibid.*, May, 1850, p. 450; ヘーゲル全集を参照する脚注は、Macfarlane, *ibid.*, June, 1850, p. 12. ただ、当時のイギリスにおいては1846年にジョージ・エリオットによるシュトラウスの『イエス伝』の英訳が出版されて評判をとったことはよく知られたことであって、ヘーゲル哲学を扱ったその最終章はことに著名であった(Kirk Willis, *The Introduction and Critical Reception of Hegelian Thought in Britain 1830-1900*, *Victorian Studies*, Autumn 1988, pp. 85-111, p. 94)。したがって、後に見るデイヴィッド・ブラックのようにマクファーレンを英語界におけるヘーゲルの最初の翻訳者であり解説者であったと位置付ける(David Black, *Helen Macfarlane. A Feminist, Revolutionary Journalist and Philosopher in Mid-Nineteenth Century England*, Lanham, Maryland, USA 2004, p. 72)のは、当時のイギリスにおけるヘーゲルおよびその哲学の受容を正確に把握した評価とはいえないであろう。

<sup>9</sup> 「[1850年] 12月19日付エンゲルス宛イエニー・マルクスの手紙」*MEGA*<sup>2</sup>, III/3, S. 705, 707; MEW, Bd. 27, S. 612. 初出は *MEGA*<sup>1</sup>, III/1: *Der Briefwechsel zwischen Marx und Engels 1844 - 1853*, Berlin 1929, S. 123/124.

病で、マクファーレンが受けた侮辱になんの仕返しもしてやろうとせず、こういう不名誉きわまるやり方で、彼の小雑誌（*seine spoutsblättchen*）への、実際に見識をもっていた、唯一の寄稿者（*Mitarbeiter*）と交わりを絶ったのだ。彼の新聞（*seine Blättchen*）における稀にみる才能をもつ人物（*Rara avis*）と。』<sup>10</sup>

マルクスの手紙の上掲引用箇所からは、マクファーレンとハーニーとの関係が途切れたこと、また、その原因が上に引用した1850年末の新年宴会における出来事であったとの見方などが生まれてくる。

以上、マルクス夫妻の二通の手紙からは、ヘレン・マクファーレンがハーニーの『レッド・リパブリカン』に対する「稀にみる才能をもつ」「実際に見識をもっていた、唯一の寄稿者」であるとマルクスが判断していたことを知り得るのであった。

## 2. マクファーレンの伝記的事実についての従来の研究と調査結果

### (1) ショイエンおよびその後のチャーティスト研究における成果

ショイエンによるハーニーの伝記が1958年に刊行された<sup>11</sup>こと、および、それを承けてチャーティスト研究者たちが行った諸研究について、水田氏は次のように述べる。

「100年余りたって、1950年代末から60年代前半にかけて、ようやくいくらかの光が、マクファーレンに投げかけられるようになった。まずハーニーの研究者であるショイエン [Schoyen] が、『民主評論 [The Democratic Review]』『赤い共和派 [The Red Republican]』『人民の友 [The Friend of the People]』をつうじて寄稿したハワード・モートン [Howard Morton] が、マクファーレンの筆名ではないかという、サヴィル、アンドレアス、アブラムスキーなどが、この推定を支持した。』<sup>12</sup>

ショイエンの推測の基礎となっているマクファーレンの論説における諸叙述は先に見た通りであるが、ハワード・モートンをその筆名であるとする推測の根拠は、1850年中を通じて、『デモクラティック・レビュー』、『レッド・リパブリカン』および『フレンド・オブ・ザ・ピープル』各誌紙上に掲載されたハワード・モートンの諸論説には、『宣言』の諸原理の要約が含まれていたこと、モートンとマクファーレンのイニシャルが H. M. で双方同一であること、「1850年におけるチャーティスト」において、モートンが「数年の不在の後、最近この国に戻ってきた私は」<sup>13</sup>と記している点は、1848年時点でウィーンに滞在してその革命を実見したマクファーレンの経験と重なること

<sup>10</sup> 「1851年2月23日付エンゲルス宛マルクスの手紙」*MEGA*<sup>2</sup>, III/4, S. 44-48; MEW, Bd. 27, S. 195/196. この手紙の初出は Hrs. v. A. Bebel / Ed. Bernstein, *Der Briefwechsel zwischen Friedrich Engels und Karl Marx 1844 bis 1883*, Bd. 1, Stuttgart 1919, S. 144-146であるが、当該引用箇所は編者ベルンシュタインの手によって伏せられ、公表されなかった。当該箇所も含めて完全に収録されたのはその10年後の *MEGA*<sup>1</sup>, III/1, Berlin 1929, S. 150-155 においてであった。訳文は『マルクス・エンゲルス全集』第27巻（大月書店）所収の村田陽一訳にならったが、一部変更してある。特に、*Rara avis*（珍しい鳥）については、マクファーレンの能力について述べているものと解釈した。

<sup>11</sup> A. R. Schoyen, *The Chartist Challenge. A Portrait of George Julian Harney*, London 1958. モートンがマクファーレンの筆名ではないかとするショイエンによる推定については同書の pp. 202-204を参照。

<sup>12</sup> 水田、前掲書、113/114頁（〔 〕内は橋本による）。

<sup>13</sup> *The Red Republican*, p. 2/III.

等があった。<sup>14</sup>

## (2) 『ハーニー・ペーパーズ』(1969年)収録のハーニーの手紙

続いて1969年には、アムステルダム の社会史国際研究所に所蔵されていたハーニーの書簡およびハーニー宛の書簡が F. G. ブラックおよび R. M. ブラックにより『ハーニー・ペーパーズ』としてまとめられた<sup>15</sup>。そこには次の「1850年12月16日付エンゲルス宛ジョージ・ジュリアン・ハーニーの手紙」等いくつかの手紙が初めて収録され、公にされた。

### 1) 1850年12月29日付マルクス宛ジョージ・ジュリアン・ハーニーの手紙

紹介する順序が次の手紙の日付と相前後するが、まず、ハーニーがマルクスにフラターナル・デモクラート(友愛民主主義協会)主催の上記新年宴会への招待券を同封して届ける手紙が収録されている。同封されたのはマルクス夫妻の分としてダブル券1枚、エンゲルスおよびシュラムの分としてシングル券2枚であることが分かる。また、手紙では招待した皆に明日の晩に会えると書かれている<sup>16</sup>ので、ハーニーの誤記でない限りは、新年宴会が、すでに見た1851年2月23日付エンゲルス宛マルクスの手紙にある「おおみそか」とは厳密に31日ではなくて、その前日の30日の晩だったという可能性も生じてくる。

### 2) 1850年12月16日付エンゲルス宛ジョージ・ジュリアン・ハーニーの手紙

『レッド・リパ [ブリカン]』および『フレンド・オブ・ザ・ピープル』の番号を同封してお届ける。／マクファーレン嬢の宛先は、「バーンリー、ブリッジエンド、ヘレン・マクファーレン」だ。「ヘレン」をお忘れなく。<sup>17</sup>

当時、病中であったハーニーが、おそらくはそれまで自ら行っていたバーンリーに住むマクファーレン宛の『レッド・リパブリカン』および『フレンド・オブ・ザ・ピープル』の郵送を、近隣のマンチェスターに住むエンゲルス宛で送る分にまとめ、マクファーレンへの代送を依頼するために、彼女の宛先をエンゲルスに伝えているのである。

ここ記されたヘレンの住所を手掛かりとして、バーンリーの調査を行う可能性が開かれていた。

### (3) デイヴィッド・ブラック『ヘレン・マクファーレン』(2004年)における調査結果

この調査を実際に行い、「ほとんどなにもわかっていない」状況に打開の糸口を与えたのが、「マルクス主義的人道主義的雑誌『ホップゴブリン (Hobgoblin)』の編集者デイヴィッド・ブラック」<sup>18</sup>が2004年に公刊した著作『ヘレン・マクファーレン。イギリス19世紀半ばの女性解放論者、革命的ジャーナリストにして哲学者』<sup>19</sup>であった。

同書を評した K. フレットはこう述べる。

「デイヴ・ブラックの新著は、あいにく、1850年代初頭以降にヘレン・マクファーレンに何が

<sup>14</sup> 後掲のリスト、Bibliography of Helen Macfarlane (Howard Morton) を参照。

<sup>15</sup> Frank Gees Black / Renee Métivier Black ed., *The Harney Papers*, Assen 1969.

<sup>16</sup> *Ibid.*, p. 261.

<sup>17</sup> *Ibid.*, pp. 259/260. なお、／は段落で、橋本による。

<sup>18</sup> Allan Armstrong, A Review, *Emancipation & Liberation*, Issue 010, Summer 2005.

<sup>19</sup> David Black, *Helen Macfarlane. A Feminist, Revolutionary Journalist and Philosopher in Mid-Nineteenth Century England*, Lanham, Maryland, USA 2004.

起こったのかを提示することはできなかったが、しかしながら、ブラックは1840年代および1850年代初頭における彼女の生活について一連の新たな事実と詳細を明らかにした。<sup>20</sup>

この「一連の新たな事実と詳細」とは、もっぱら次の2点についての調査結果とみてよい。すなわち、第一に、1851年の国勢調査記録、および第二に、スコットランド国立文書館に所蔵されている誕生・洗礼名に関するスコットランド教会記録、これらについての調査結果である。

先のハーニーの手紙がエンゲルスに知らせているヘレンの住所を手掛かりとして、バーンリーの該当地区の直近の時期である1851年の国勢調査記録が調べられた。1851年のこの地区の国勢調査は3月30日夜に行われた。その記録から、当時ブリッジエンド No. 3に居住していたのは、ウィリアム・T. マクファーレン、更紗捺染業、33歳；その妹アグネス、14歳、無職、であることが明らかとなった。また、兩人ともスコットランド生まれであることが記録されており、当家には家政婦エリザベス・トムプソン、22歳がいたことも記載されているとのことである。<sup>21</sup>遺憾ながらヘレンが同居してはいなかったわけだが、ブラックはここから種々の推定を行っている。

また、これによりスコットランド生まれということが判明したからであろう、スコットランド国立文書館に所蔵されている誕生・洗礼名に関するスコットランド教会記録についての調査がなされ、その結果が報告された。

「ウィリアム」、「ヘレン」、「アグネス」各マクファーレンの記載は適切な年齢（ヘレンについてはブラックの推定）差に応じた時間間隔で登録されてあるものの、遺憾ながら、父の名前、誕生の場所についての共通性がないため、3人のきょうだいの関係や誕生の場所をこの記録から解明することはできなかったのである。<sup>22</sup>

したがって、フレットも述べるように、「ブラックはヘレン・マクファーレンのこれまで不分明であった生涯についていくつかの興味深い新たな詳細事を提供したのであって、ここにさらなる調査のための基礎が置かれたのであれば幸いである」<sup>23</sup>という評価となったわけである。

### 3. ブラック、ヨウマンおよびスペンサーによる最新の調査結果（2012年）

果たして、実際に「さらなる調査」がなされ、かなりの事実が明らかになった。これは当初別々に調査を進めていたブラックとBBCスコットランドのプロデューサーであるルイズ・ヨウマン（Louise Yeoman）がその後共同で調査を進め、さらに南アフリカの歴史家シーラ・スペンサー（Shelagh Spencer）の協力を得て達成された成果であるという。その結論を記せば次のようである<sup>24</sup>。

<sup>20</sup> Keith Flett, Review: A famous footnote. David Black, Helen Macfarlane. A Feminist, Revolutionary Journalist and Philosopher in Mid-Nineteenth Century England (Lexington Books, 2005[ママ]), *London Socialist Historians Group "Newsletter"*, No. 24, Summer 2005.

<sup>21</sup> D. Black, *ibid.*, p. 43.

<sup>22</sup> *Ibid.*, pp. 44/45.

<sup>23</sup> Flett, *ibid.*

<sup>24</sup> 昨年2012年11月26日（月曜日）、BBC ラジオ・スコットランドの番組『ウィメン・ウィズ・ア・パスト』の第1集第3話（Women with a Past - Helen McFarlane -, Series 1 - Episode 3）として14時5分〔日本時間同日23

### (1) マクファーレンの幼少期と家業の破産

ヘレン・マクファーレンは1818年9月25日にスコットランドのペーズリー (Paisley) 近郊のバーヘッド (Barrhead) のクロスミル (Crossmill) で生まれた。父はジョージ・マクファーレン (1760年生)、母はヘレン・ステンハウス (1772年生)。マクファーレン家はキャムプシー (Campsie) とクロスミルに更紗捺染工場をもつ工場主で、ストライキを抑えるために竜騎兵を導入することも辞さない裕福な家庭であった。いわばヘレンはグラスゴウのロイヤル・クレセントのファッショナブルなタウンハウスの世界と臭気芬々とするも生き生きとした捺染工場の世界という二つの世界の中で暮らしていたことになるという。ヘレンがドイツ語を習得することになったのは、一家が捺染を当時世界のトップクラスの技術をもっていたギーセンのドイツ人科学者たちのもとで学んだためであるという。

ところが、工場主の父が亡くなった半月後、1842年のセント・アンドリュース・デイ (11月30日) に家業が破産し、兄弟姉妹とも相続権を放棄せざるを得なくなる。そのため、ヘレンはガヴァネスとして、ウィーンに赴き、そこで1848年革命を実見することになったのであろうと推測されている。また、これとともに、ショイエン以来、彼女の筆名と推定されるハワード・モートンも生まれたとされる<sup>25</sup>。

この後、1850年中のチャーティスト各誌紙でのヘレンの活躍はよく知られたところである。

### (2) 南アフリカへの移住

では、マルクスが先の手紙でエンゲルスに書いた1850年おおみそかたの新年宴会の出来事以降、杳として知れなくなった彼女の消息はどのようなものだったのであろうか。南アフリカの歴史家シーラ・スペンサーの協力を得て、ブラックとヨウマンは次のことを明らかにした。

ヘレンは、1848年革命の亡命者である F. プルースト (Proust)<sup>26</sup>と愛し合い、1852年に結婚し、翌1853年女児に恵まれる。コンスエラ・ポーリン・ローランド・プルーストと名づけられた。この名前は、当時よく読まれたジョルジュ・サンドの小説『コンスエロ』の主人公である歌姫の名であり、また当時の急進主義的フランス人女性解放論者の政治犯ポーリン・ローランドの名であって、この二人の名にちなむものであったという。したがって、そのような名付けを行った親は女性解放論者

時5分]から28分間、ヘレン・マクファーレンが取り上げられ、放送された。本稿ではそれを前日に伝えたBBCスコットランドのプロデューサーであるルイズ・ヨウマンによるニュース「ヘレン・マクファーレン：カール・マルクスが賞賛した急進主義女性解放論者 (Helen McFarlane - the radical feminist admired by Karl Marx)」[<http://www.bbc.co.uk/news/uk-scotland-20475989>]に基づいて紹介している。[本節部分は2012 (平成24) 年度中に作成され、その要点が平成24年度科学研究費実績報告書 (2013年4月15日付) として提出された。その後、2013年4月18日付でウィキペディア [[http://en.wikipedia.org/wiki/Helen\\_Macfarlane](http://en.wikipedia.org/wiki/Helen_Macfarlane)] にこの新たな調査結果を踏まえた事実が盛り込まれたようである。本文の紹介中の下線部は年次等明確になるためその記載から採ったもの。

<sup>25</sup> ハワード・モートンがヘレン・マクファーレンの筆名であるというショイエン以来の推定についてのより立ち入った検討は、やはり妥当であろうとする立場から、本稿で後論し、補強している。

<sup>26</sup> ファーストネームについて、上記 URL においてはフランシス (Francis) であるが、番組宣伝の URL [<http://www.bbc.co.uk/programmes/b01nztlg>] においてはフレデリック [Frederick] とされている。なお、前記のウィキペディアではフランシス。

であることを公言するような名であるとのことである。<sup>27</sup>

1853年、ヘレンたちは成功を夢見て南アフリカのナタール (Natal) に向け移民しようとする。しかし、患っていた彼女の夫フランシスは移民船がイギリスの領海を離れぬうちに船から跳び降りて亡くなってしまう。悩ましい航海の後、ヘレンは8ヵ月になっていたコンスエラとともに南アフリカに到着するが、その数日後にはコンスエラにも先立たれてしまう。

### (3) 帰国とその後

ヘレンはイギリスへ戻る。彼女はその後どうなったのか。1854年にヘレンは英国国教会の教区司祭ジョン・ウィルキンソン・エドワーズと出会い、1856年結婚し、ハーバートとウォルターという名の二人の男の子をもうける。が、1860年3月29日にまだ幼い二人を残しわずか41歳で亡くなってしまう。その墓——ヘレン・エドワーズ、当教区の司祭ジョン・ウィルキンソン・エドワーズ師の妻の——は、ナントウィッチ (Nantwich) のバディリー (Baddiley) のチェシャー (Cheshire) 教区にあるという。

ヘレンが聖職者と結婚したということから、では、彼女は革命を放棄したのかという問題が生じてくる。ブラックとヨウマンらはこう推測している。

すでに言われており<sup>28</sup>、近年ではブラックの著作の第7章「キリスト教と社会主義」において詳論されたように彼女の共産主義観にはキリスト教的色彩が濃厚に存在する。つまり、彼女の共産主義は当時ドイツからやってきたばかりの急進主義的キリスト教に染め上げられていたのではないかというのである。イエスは革命の「最初の殉教者」であった、働く人々に説教した「ガリラヤのプロレタリア」であったと把握していたからである。彼女の革命的著作は『聖書』にどっぷり浸かっていたという。というのは、万人は人種、階級および性において平等だが、それは神が万人に住まうからであるといった見方だからである。あなたの仲間である人間を利益のために利用することがまったく不道德でないというならば、それは神を冒瀆するものである、というのである。ヘレンの妖怪は革命の偉大なる日を必然的に招くマルクス主義の歴史および階級闘争の精神であったが、それは、彼女の夫の聖なる精神および偉大なる日すなわちイエスの再来への夫の信仰ときわめて近い類縁者なのであった。もしヘレンが外向きの急進主義を引っ込めて、その結果チェシャー・ハントの獵犬たちを驚かせることがなくなったにしても、正義を目指す彼女の急進主義的欲求は決して消え去ることはなかったのではなかろうか、というのである。

<sup>27</sup> 筆者は、この女兒の名のうちコンスエラ・ポーリンの部分については、『フレンド・オブ・ザ・ピープル』にもその英語抄訳が連載されていたジョルジュ・サンドの『コンスエロ』にちなむものではないかと推測する。というのは、コンスエラはもちろんのことながら、それに続くポーリンという名もサンドがヒロインのコンスエロを作り上げる際のモデルとした当時の人気オペラ歌手ポーリース・ガルシア＝ヴィアルドの名を踏まえているものと考えからである。このことから『コンスエロ』の抄訳掲載には、論説を寄稿しなくなっていたマクファーレンがなんらかの形で関係していた可能性をも見ておく必要があるのではなかろうか。

<sup>28</sup> ユッタ・シュヴァルツコプフによれば、このような指摘はジョン・サヴィルが1968年に『クリスチャン・ソーシャリスト (The Cristian Socialist)』に掲載した論文においてすでになされているとのことである (Jutta Schwarzkopf, review, *Victorian Studies*, Volume 48, Number 3, Spring 2006, p. 528) が、筆者未見。

#### 4. 小 括

以上、最近の調査結果を紹介したが、さしあたり以上の新たな調査を前提すると、従來說に種々の再考の余地が生じてくるのは言うまでもない。とはいえ、これら最新の調査結果については、それらに基づく推定・推測を行う前に、やはり通常の手順を踏んだ学術的追試が必要とされるところである。

## Ⅱ いずれも存在しないハーニーの手紙とアンドレアス論文

### 1. ハーニーの手紙についてのデ・ヨングの情報

ベルト・アンドレアスはその『宣言』の書誌21番にこう書いていた。

「ヘレン・マクファーレンはエンゲルスがマンチェスターに住んでいた時におそらくマンチェスターに住んでいた。……1850年12月19日付でマルクス夫人がエンゲルスに宛てた手紙から、次のことが明らかになる。すなわち、エンゲルスがマクファーレンの翻訳に関係したということが。1848年にすでにバルメンでエンゲルスは『宣言』の英語への翻訳を企図した。(1848年4月25日付マルクス宛エンゲルスの手紙を参照) われわれは社会史国際研究所のF. デ・ヨング博士から1848年のエンゲルスの翻訳を公刊するというハーニーの意図を立証するエンゲルスに宛てたハーニーの手紙について耳にしている。この文通そのものは、これまで利用できなかった。……」<sup>29</sup>

ここから(特に、下線部)から、筆者はかつて、「『レッド・リパブリカン』紙掲載の英訳について、一層の検討が必要となっていることは争えないところである」とまとめ、次のように注を付した。

「アンドレアスがすでに指摘しているものの、未検討のままとなっている資料——『宣言』のエンゲルスによる英訳を出版する意図が認められるというアムステルダム社会史国際研究所所蔵のハーニーのエンゲルス宛の手紙類の検討などもそれに含まれるであろう。」<sup>30</sup>

1998年3月から翌年1月まで筆者は社会史国際研究所で在外研究をする機会に恵まれ、このハーニーのエンゲルス宛の手紙を同研究所のアルヒーフおよびコレクション類の中に探し求めたが報われることはなかった。そして、おそらくそのような手紙はないのではないかと疑念を抱くに至った。そのため、先の拙稿における中間総括を見直して、科研費成果報告書等においては次のように訂正した。

「アンドレアスが、未検討のままとなっていると指摘した、『宣言』のエンゲルスによる英訳を出版する意図が認められるというアムステルダム社会史国際研究所所蔵のハーニーのエンゲルス宛の手紙類……について同研究所で探索したが遺憾ながら該当するものを見出すことはできなかった。」<sup>31</sup>

<sup>29</sup> Andréas, *ibid.*, p. 26, footnote 3. なお、下線部は橋本。また、アンドレアスの言うように「次のことが明らかになる」わけでは決してない。むしろ別の解釈が妥当であり、それについては後論する。また、1848年4月25日付マルクス宛エンゲルスの手紙の該当章句は後の脚注を参照。

<sup>30</sup> 前掲、拙稿「『共産党宣言』普及史研究の諸成果」139頁、注(23)参照。

<sup>31</sup> 平成15年度～平成18年度科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))成果報告書「『共産党宣言』初版の出版史・

したがって、そのような手紙が本当にアムステルダム社会史国際研究所に存在するのだろうかという謎だけが残ることになった。

## 2. アンドレアス著「ヘレン・マクファーレン」論文

また、アンドレアスは先の脚注に先立って、書誌18番への脚注3にも、フェルトリネリ研究所の紀要に掲載した自身のヘレン・マクファーレンに関する論文を cf. ANDREAS, BERT Helen Macfarlane dans *Ananali*, Anno V, Milano 1962と参照指示していた。

『レッド・リパブリカン』のリプリントの序文をジョン・サヴィルが書いているが、サヴィルもまた『宣言』の英訳者ヘレン・マクファーレンに言及している箇所、このアンドレアス論文を参照指示する脚注を付している<sup>32</sup>。

そのため筆者は、このアンドレアスのヘレン・マクファーレンについての論文を捜し回った。ところが、結局どこにもそれを求めることができなかった。*Ananali*, Anno V だけでなく、その前後、さらにはその他の年次をかなり広く調べてみたが、そこに当該論文を見出すことはできなかったのである。サヴィルは何を見たのであろうかとも考えた。

そのため、先の疑問とはまた別に、謎はもう一つ増えて、幻のアンドレアスによるヘレン・マクファーレン論文というのを抱え込むことになっていたわけである。

## 3. いずれも存在しないハーニーの手紙とアンドレアス論文

2011年9月にアムステルダム社会史国際研究所を再訪する機会に恵まれ、これらの点を再検討することにより、筆者は一応これらの謎に次のような結論を与えた。

まず、ハーニーの手紙だが、研究所のデ・ヨンクの言っていた手紙はなんらかの錯誤であって、存在しないということである。というのも、もし実在するのであれば、その手紙は先に紹介した F. G. ブラック / R. M. ブラックが編集し1969年に公刊された『ハーニー・ペイパーズ』に収録されないはずはないからである。ところが、本書中にはそのような趣旨を含む手紙は収録されていない。見出されるのは『評論』第5・6合冊号に掲載された「ドイツ農民戦争」の英訳をハーニーがエンゲルスに打診した文言のある手紙<sup>33</sup>である。デ・ヨンクはおそらくこの手紙を『宣言』の翻訳の話と取り違えたものとするのが自然である。

次に、アンドレアス著「ヘレン・マクファーレン」論文についてであるが、この論文は実際には書かれなかったものと思われる。というのは、アンドレアスの年譜および書誌<sup>34</sup>にも当たってみたが、そこにこの論文は記載されていないからである。アンドレアスは、デ・ヨンクから得た情報を

---

影響史についての研究」, 2007年5月, 249頁。

<sup>32</sup> John Saville, Introduction., *Facsimile of Red Republican*, New York (The Merlin Press) 1966, p. xii/II, footnote 61.

<sup>33</sup> *The Harney Papers*, p. 259.

<sup>34</sup> Jacques Grandjonc, *Une vie d'exilé. Bert Andréas 1914 — 1984. Repères chronologiques et activité scientifique*, *Schriften aus dem Karl-Marx-Haus, Beiheft*, Trier 1987, p. 44/45, p. 72/73. アンドレアスの自用本はトリーアのカール・マルクス・ハウスの「ベルト・アンドレアス遺文庫」に保存されている。これを参看すれば、そこではこの論文が抹消されている可能性がある。最終的にはその確認が必要であろう。

基にこの論文を書く予定であり、その『宣言』書誌に先取りして注記していたものの、実際に研究所でハーニーの手紙を解読するにおよんで、それがすでに旧メガに収録済みの手紙<sup>35</sup>であって、マクファーレンについての情報を記したものではないことが分かり、論文執筆は断念したが、『宣言』書誌への注記を削除するのには間に合わなかったのではなかろうか。

### Ⅲ 『共産党宣言』起草者名の公表の先後関係について

#### 1. 問題の意味——黒滝正昭氏の問題提起

黒滝氏は水田氏の『宣言』邦訳への解説について種々の疑問を出される中で、起草者名の公表の先後関係について、アンドレアスに依拠して次のように述べた。

「まずマルクスが『宣言』の著者であることを初めて公けに認めたのは、すでに1850年6月、Neue Deutsche Zeitung 編集者に宛てた「声明」(同紙7月4日号に掲載)においてであること (ibid., pp.24-25.) が明らかにされている [……]。その後マルクス、エンゲルスが共に『宣言』の著者であることが「外国人に対して初めて」紹介された (ibid., pp.26) のが、[……] The Red Republican, No.21, Vol.I, November 9, 1850紙上のヘレン・マクファーレンによる『宣言』の最初の英訳によせたG・J・ハーニーの序(ただし序そのものは無記名)においてである。さらにほぼ同時期のNeue Rheinische Zeitung. Politisch-ökonomische Revue, V./VI. Heft, Mai bis October 1850〔アンドレアスでは『マルクス年譜』にしたがって50年11月に出版されたとされている (p.27)〕誌上の『宣言』第Ⅲ章のみのドイツ語原文での転載への編集部脚注の中で「マルクスとエンゲルスは、ドイツ語で初めて、自分たちが『宣言』の著者であることを明らかにした」(ibid., p.27)<sup>36</sup>

このような経緯があるために、多少立ち入ってこの先後関係を確認しておく必要があるわけである。

本節の次項2. においては、黒滝氏も紹介している通り、1850年11月の『レッド・リパブリカン (The Red Republican)』掲載の英訳に先立って、1850年7月に『新ドイツ新聞 (Neue Deutsche Zeitung)』に掲載されたマルクスの「声明」を取り上げて、その掲載の経緯を確認する。問題となるのはこの「声明」における『宣言』からの一部引用とマルクスによるその引用の仕方である。あらかじめその結論を述べれば、この「声明」こそが、マルクスが『宣言』の起草者であることを自ら公にした最初の文献資料であると位置付けることができる<sup>37</sup>。

<sup>35</sup> Harney an F. Engels, 9. Dezember 1850, MEGA<sup>1</sup>, III/3, S. 694.

<sup>36</sup> 黒滝, 前掲書, 367頁, 注(10)のうち, 特に, アンドレアスの見解 (Andréas, Bert: *Le Manifeste Communiste de Marx et Engels. Histoire et Bibliographie 1848-1918*, Milano 1963, p. 25) を参照している行論 (引用中 ibid. は本書を指す。また, [ ] は黒滝氏による)。なお, 下線は黒滝氏の原文のもの, [……] は引用者 (橋本) による省略を示す。また, 引用中で「序」とあるのは, 本稿では〈まえがき〉と呼んでいる。

<sup>37</sup> この「声明」については, Hal Draper, *The Adventures of the Communist Manifesto*, Alameda 1994, pp. 27/28をも参照されたい。なお, 以下本項の行論は, 拙稿『『新ドイツ新聞』掲載のマルクス「声明」——『共産党宣言』の起草者名の普及史(1)——マルクス・エンゲルス研究者の会『2009年次第25回例会報告要旨集』2010年2月, 16/17頁に所要の加除を施したものである。

## 2. 『新ドイツ新聞』掲載のマルクス「声明」

### (1) オットー・リューニングによる『新ライン新聞。政治経済評論』の書評

『新ライン新聞。政治経済評論』は“同盟の機関誌”，同盟の思想的な脈管系統であって，その安定的な発行は最重要の課題であった。マルクスは，フランクフルト・アム・マインで発行されていた『新ドイツ新聞』に『評論』の紹介的な書評が掲載されることを期待し，同紙の編集者で同盟員であったヨーゼフ・ワイデマイアーを介して，その夫人ルイーゼの兄でありまた同僚でもあったオットー・リューニングにその執筆を依頼した。

その書評は同紙1850年6月22, 23, 25, 26日付の四つの号（第148～151号）に無署名で掲載された。『評論』第1冊～第4冊所収論説の内容に詳細に立ち入るものであったが，論調には当時のリューニングの小ブルジョア民主主義者としての見地が色濃く反映していた。とりわけマルクスが「1848～1849年」（後に補足を伴い『フランスにおける階級闘争』として知られる）のなかで初めて用いた“労働者階級の独裁”について，連載第1回のなかで次のように言及されていた。

「だが階級支配はつねに不道徳で非理性的状態にあり，また，たとえわれわれが，労働者階級の支配のほうが，ユンカーたちや取引所狼たちの階級の支配よりも，前者は社会の有用な構成員を含み，後者は不必要な構成員を含むために，百倍も道徳的でありまた理性的であると考えているにしても，それにもかかわらず，われわれは「小ブルジョア民主主義者たち」と一緒にされてしまう危険を冒してでも，現代の革命運動の目的と目標を，ある階級の支配を他の階級の支配へ移すことに見出すのではなくて，階級的相違の根絶に見出すことができる。」<sup>38</sup>

リューニングの言及は，労働者階級の政治支配を求めること，労働者階級の独裁を樹立しようとすることを非難している。労働者階級の政治支配は，新たな階級的相違をまねく，それはあらゆる階級的相違を根絶するという共産主義者たちの目的に背く，というのである。これはマルクスにとって，自身の主張を曲解し歪めたものと考えられた。

### (2) マルクスの「声明」

マルクスとエンゲルスは当初，『評論』の続刊で反論するつもりでいた。しかし，その発行が遅れることになったため，「声明」と題されて以下の章句を含むリューニング宛の手紙という体裁をとった記事が『新ドイツ新聞』7月4日付（第158号）に掲載された。

「本年6月22日付貴紙学芸欄においてあなたは，私が労働者階級の支配および独裁を主張するのを非難されました。他方であなたは私に階級的相違そのものの廃止を唱えられます。このご指摘は私には理解しかねます。／『共産党宣言』（1848年の二月革命前に公刊された）の16頁にはこうあるのをあなたは大変よくご承知でした。「プロレタリアートが，ブルジョアジーに対する闘争において，必然的に自らを階級に結合し，革命によって自らを支配階級とし，そして支配階級として強力的に古い生産諸関係を廃止するときには，プロレタリアートは，この生産諸関係とともに，階級対立の，諸階級そのものの存在諸条件を，したがってまた階級としてのプロレタリアート自身の支配を廃止する！」と。／あなたは，私が『哲学の貧困』のなかでブルードンに対

<sup>38</sup> MEGA<sup>2</sup>, I/10, S. 952.

して1848年2月以前に同一の見解を主張したのを、ご存知です。』<sup>39</sup>

### (3) 小 括

この「声明」の内容上の意義についてはすでに明らかにされている<sup>40</sup>。ここで確認したいのは、マルクスによる『宣言』からの引用の仕方である。自らの手になる連続論説「1848～1849年」における「労働者階級の支配および独裁」の意味をリューニングに説くために、別の文書である『宣言』の内容明瞭な箇所を新たに引用している。このような引用は一般的な参照ととり得るものの、その論旨の運びは、あたかもリューニングがすでに『宣言』の起草者がマルクス自身であることを知っていたことを前提にしているかのようである。少なくとも、このような書き振りは読者に『宣言』の起草者がマルクスなのではないかと思わせる結果となろう。また、マルクスが『宣言』に続けて、さらに自著である『哲学の貧困』をも同様の筆法で引用している点は、こうした推論を一層補強する形となる。

以上、約言すれば、このような引用の仕方によって、マルクス自身が『宣言』の起草者であるという事実がこの「声明」において半ば公然となったと言えよう<sup>41</sup>。また、逆に、ここからはリューニングらマルクスの友人・知人の間では『宣言』の起草者がマルクスその人であることが周知されていたことが分かるわけである。

### 3. 『レッド・リパブリカン』第20号の予告記事

なお、これまで紹介されることがなかったように思われるが、予告記事があった。『宣言』が連載される直前の号に掲載された次のような予告である。

「予告。／『レッド・リパブリカン』の第21号〔次号〕から、これまでは英語で出版されたことがまったくなかった、名高い『ドイツ共産主義者の宣言』の翻訳を開始する。』<sup>42</sup>

この予告記事を勘案すれば、『レッド・リパブリカン』においてはすでに10月までには翻訳掲載が決定されており、11月に入ってからすぐこのような連載の予告がなされたものようである。とはいえ、英訳題目がまだ確定していなかったのか、ここでの題目と実際の題目「ドイツ共産党の宣言(MANIFESTO OF THE GERMAN COMMUNIST PARTY)」とでは、特に「党(PARTY)」の有無と

<sup>39</sup> *Ibid.*, S.354; MEW, Bd.7, S.323.

<sup>40</sup> M. I. Michailow, *Der Kampf von Karl Marx und Friedrich Engels für die proletarische Partei 1849-1852, Aus der Geschichte des Kampfes von Marx und Engels für die proletarische Partei. Eine Sammlung von Arbeiten.* Berlin 1961, S.137/138 (拙訳は『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』八朔社、第18号、79頁)。ちなみに、マルクスの「16頁」という参照指示は彼が使用していた版本が23頁本であることを示している。

<sup>41</sup> 前掲の黒滝氏著作からの引用中、アンドレアスの該当箇所への言及を見よ。

<sup>42</sup> NOTICE, *The Red Republican*, No. 20. — Vol. I, Saturday, November 2, 1850, p. 157/I. [ ] 内は橋本による。原文は次のよう。

NOTICE.  
*In No. 21 of the Red Republican will be  
 commenced a translation of the celebrated  
 MANIFESTO  
 OF THE GERMAN COMMUNISTS,  
 never before published in the English language.*

いう点で相違がある。しかし、いずれにも「ドイツ」という語が入っており、後論するが、「大陸の諸社会主義」の紹介という体裁をとるといふ含みが当初からあったことが窺われる。

#### 4. 『レッド・リパブリカン』と『評論』との先後関係

マルクスおよびエンゲルスが『共産党宣言』の起草者であるという事実が誌紙上で初めて明らかにされたのは、『レッド・リパブリカン』1850年11月9日〔土曜日〕付に掲載された『共産党宣言』最初の英訳の折である。しかしながら、本項においてこの点に関わる事実について若干の整理を行うのは黒滝氏が問題提起しているように、次のような種々の事情が錯綜しているからである。例えば、従来、同年に発行された『新ライン新聞。政治経済評論』第5／6合冊号が最初であるとの見解もあったからである。起草者名の公表初出誌紙について異なる見解が生じていたのはゆえなしとしない。『評論』は月刊誌の体裁をとっていたから、実際にはその発行が遅れるのが常態であったにもかかわらず、第1号が1850年の1月から発行されたものと考えれば、第5／6合冊号はその年の半ばからそう遅くない時期に発行されたものとみるのももっともであろう。また、従来、黒滝氏も書いているように『マルクス年譜』の11月29日という記載が典拠であった。しかし、その根拠として挙示されている「1850年12月1日付アイゼン書店（ケルン）宛シューベルトの手紙」には、その日付時点で第5／6合冊号がすでに発行されていることを伝えるのみであって、その正確な発行時期について記しているわけではなかった<sup>43</sup>。つまり、11月の発行であることは分かっていたにしても、一般には、その確たる日付が不明であったという事情があるように思われる。

その他にも、各論者が起草者名の初出とする際にその基準を明示していなかったことがある。『宣言』は原文がドイツ語であるから、イギリスにおける英訳公表時に起草者名が明示されたところで、意義を見出しがたいとみることもあろう。一方、原ドイツ語で公表されたにしても、第三章のみの「社会主義のおよび共産主義的文献」という題目での部分的公表は『宣言』全体の公表でないとみられる場合もあろう。また、最初の英訳は、ほぼ全文の翻訳ではあるが、全ての部分を訳出したものではなく、一部省略されていた。さらに、『レッド・リパブリカン』の場合、〈まえがき〉において起草者がその英語読みで明らかにされているのに対して、『評論』では編集者の脚注という形で、両著者名と題目とがドイツ語で明示されている。言語、対象とする読者、再録が全文か一部か、誰がどのような形式で公表しているのか等、種々の事情への考慮が十分ではなかった。

その事実関係を確認しよう。

##### (1) 『新ライン新聞。政治経済評論』第5／6合冊号

まず、『新ライン新聞。政治経済評論』はマルクスの編集する月刊誌であった。使用言語はドイツ語である。その第5／6合冊号の100～110頁に『宣言』の第三章の部分だけが再録された。もちろん原語のドイツ語である。それがマルクスおよびエンゲルスによって起草されたことは編集者による脚注部分において次のように紹介された。もちろん編集者がマルクスであることは、本合冊号

<sup>43</sup> Hrsrg. v. Koszyk, Kurt / Obermann, Karl, *Zeitgenossen von Marx und Engels. Ausgewählte Briefe 1844-1852*, Assen / Amsterdam 1975, S. 368.

においてもその扉に明示されている。

「われわれはここにカール・マルクスおよびフリードリヒ・エンゲルスによって起草され、二月革命の前に出版された『共産党宣言』の一部分を掲載する。編集者注記」<sup>44</sup>

そして、最も問題となるその発行日である。新メガでは、『マルクス年譜』と同様、1850年11月29日と確定されている<sup>45</sup>が、その根拠は立ち入っては明らかにされていないように思われる。

## (2) 『レッド・リパブリカン』連載

対して、『レッド・リパブリカン』は既述の通り、チャーティスト運動の指導者の一人ジョージ・ジュリアン・ハーニーが編集していた労働者向け週刊紙である。使用言語は英語である。『宣言』は英語に翻訳されて、ほぼ全文<sup>46</sup>が4回にわたって連載された。毎回「ドイツの共産主義 (German Communism.)」という欄が設けられ、「ドイツ共産党の宣言 (MANIFESTO OF THE GERMAN COMMUNIST PARTY)」という題目での掲載である。連載初回は同紙冒頭を飾り、題目の下に「(1848年2月発行)」として『宣言』オリジナルの発行年月が付け加えられ、さらに本文に先立って紹介の一文が置かれていた。先述のように、本稿では便宜のため〈まえがき〉と呼んでいる一文である。

また、全4回のそれぞれの発行日と掲載部分は次のようである<sup>47</sup>。

第1回：第1巻第21号（1850年11月9日〔土曜日〕付）。〈まえがき〉（ハーニーによる執筆者等『宣言』の紹介）、『宣言』〔はしがき〕<sup>48</sup>の部分（最終第6段落を除く）と第I章の前半部分（第29段落まで）。

<sup>44</sup> *Neue Rheinische Zeitung. Politisch-ökonomische Revue*, H. 5/6, S. 100. なお、その原文は、Wir geben hier einen Auszug aus dem von Karl Marx und Friedrich Engels abgefaßten „Manifest der kommunistischen Partei“ publicirt vor der Februarrevolution. A. d. R.

<sup>45</sup> 「エンゲルスの著述「ドイツ農民戦争」は1850年夏に執筆された。「評論。1850年5月から10月まで」は1850年11月1日に書き終えられた。この頃、第5／6合冊号の最後の諸原稿がハンブルクに送られた。合冊号は1850年11月29日に発行された。発行部数については何も知られていない。／この合冊号には、エンゲルスの「ドイツ農民戦争」の他、『共産党宣言』の第三章（そのなかでマルクスおよびエンゲルスは自分たちが著者であることを初めて——ハーニーの『レッド・リパブリカン』における『宣言』の英訳のなかでと同時に——公に表明した）、エッカリウスの論文「ロンドンにおける仕立業。大資本と小資本との闘争」（これにはマルクスおよびエンゲルスが「注記」を付している）、そして最後に「評論。1850年5月から10月まで」が収録されている」（Martin Hundt, *Zur Geschichte der „Neuen Rheinischen Zeitung. Politisch-ökonomische Revue“*, *Marx-Engels-Jahrbuch*, Bd. 1, Berlin 1978, S. 275. 下線は橋本）。

<sup>46</sup> 原文は *MEGA*<sup>1</sup>, I/10, S. 605-628に収録され、参看が容易になった。その後、ドレイパーの著作の第二部において、またD. ブラックの著作の付録2においても、マクファーレンの英訳が再録された。とはいえ、前者においては段落番号の番号付が1888年英語版が底本とした1872年ドイツ語版にならったためか、第三章第I節c項の第11（163）段落と第12（164）段落とがひとまとめにされて第（163）段落とされてしまう等で、23頁本等との相違が生じている。また、後者においては、後に詳論するが、その冒頭部になんらかの錯誤にもとづく重大な脱落がある。

<sup>47</sup> 詳しくは「表1. 23頁本と『レッド・リパブリカン』英訳の段落対応表」を参照されたい。ちなみに、『評論』第5／6合冊号に収録されたエッカリウスの論文とほぼ同一内容の「ロンドンの仕立て労働者たち」が掲載されたのは『レッド・リパブリカン』11月16日と23日の第22号と第23号とであるが、それらと前号ならびに後続号（9日付21号、30日付24号）とに掲載されている。

<sup>48</sup> 本稿では『共産党宣言』の第I章に先立つ部分を〔はしがき〕と呼んでいる。

第2回：第1巻第22号（11月16日付）。第I章の後半部分（第30段落から第I章の最終第54段落）。

表1. 23頁本と『レッド・リパブリカン』英訳の段落対応表

(凡例)

以下では各行とも < の右側が23頁本、左側が『レッド・リパブリカン』英訳の状態を表す。左側のローマ数字小文字が英訳の段落番号であり、右側の数字が23頁本(1848年ドイツ語初版)の各章・節・項ごとの段落番号である。

第I章以降に付した( )内の番号は〔はしがき〕からの通し番号である。太字は主な相違箇所を示す。

1872年ドイツ語版および1888年の英訳では段落に多少の相違がある。それら諸版との対照の便宜のため、Draper, *ibid.*, 1994に付されている両版の段落番号を[ ]内に併記した。

GERMAN COMMUNISM.

MANIFEST OF THE GERMAN COMMUNIST PARTY.

(Published in February, 1848.)

<まえがき>

i < なし

ii < なし

〔はしがき〕

i < 1, 2, 3, 4, 5

削除 < 6

CHAPTER I. BOURGEOIS AND PROLETARIANS.

i < 1(7), 2(8)

ii < 3(9), **4-1(10-1)**

iii < **4-2(10-2)**, 5(11), 6(12), 7(13), 8(14)

iv < 9(15), 10(16)

v < 11(17), 12(18)

vi < 13(19), 14(20), 15(21), 16(22), 17(23)

vii < 18(24)

viii < 19(25), 20(26), 21(27)

ix < 22(28), 23(29), 24(30)

x < 25(31), 26(32), 27(33), 28(34), 29(35)

To be continued.

GERMAN COMMUNISM.

MANIFEST OF THE GERMAN COMMUNIST PARTY.

CHAPTER I.

BOURGEOIS AND PROLETARIANS.

(Continued from No. 21).

xi < 30(36), 31(37)

xii < 32(38), 33(39), 34(40)

xiii < 35(41)

xiv < 36(42), 37(43), 38(44), 39(45)

xv < 40(46), 41(47), 42(48), 43(49), 44(50)

xvi < 45(51), 46(52)

xvii < 47(53)

xviii < 48(54), 49(55), 50(56)

xix < 51(57)

xx < 52(58), 53(59), 54(60)

GERMAN COMMUNISM.

MANIFEST OF THE GERMAN COMMUNIST PARTY.

CHAPTER II.

PROLETARIANS AND COMMUNISTS.

(Continued from No. 22).

i < 1(61), 2(62), 3(63), 4(64), 5(65), 6(66), 7(67)

ii < 8(68), **9-1(69-1)**

iii < **9-2(69-2)**, 10(70), 11(71), 12(72), 13(73), 14(74)

iv < 15(75), 16(76), 17(77), **18-1(78-1)**

v < **18-2(78-2)**, 19(79), 20(80), 21(81), 22(82), 23(83), 24(84), 25(85), 26(86), 27(87), 28(88), 29(89), 30(90)

vi < 31(91), 32(94), 33(93), 34(94), 35(95)

vii < 36(96), 37(97)

viii < 38(98), 39(99), 40(100), 41(101), 42(102), 43(103), 44(104), 45(105), 46(106), 47(107), 48(108), 49(109), 50(110), 51(111)

ix < 52(112), 53(113), 54(114)

x < 55(115), 56(116), 57(117)

xi < 58(118), 59(119), 60(120), 61(121), 62(122), 63(123), 64(124), 65(125), 66(126), 67(127)

xii < 68(128), 69(129), 70(130), 71(131), 72(132), 73(133)

xiii < 74(134), 75(135)

GERMAN COMMUNISM.

MANIFEST OF THE GERMAN COMMUNIST PARTY.

(Continued from No. 23)

CHAPTER III.

SOCIALIST AND COMMUNIST LITERATURE.

I. — REACTIONARY SOCIALISM.

a. — FEUDAL SOCIALISM.

i < 1(136), 2(137), 3(138), 4(139)

ii < 5(140), 6(141), 7(142), 8(143), 9(144), 10(145)

b. — SHOPOCRAT SOCIALISM.

i < 1(146), 2(147), 3(148), 4(149), 5(150), 6(151), 7(152)

c. — GERMAN OR "TRUE" SOCIALISM.

i < 1(153), 2(154), 3(155), 4(156), 5(157), 6(158), 7(159), 8(160), 9(161), 10(162), 11(163), 12(164[163]), 13(165[164]), 14(166[165]), 15(167[166]), 16(168[167]), 17(169[168]), 18(170[169])

II. — CONSERVATIVE, OR BOURGEOIS SOCIALISM.

i < 1(171[170]), 2(172[171]), 3(173[172]), 4(174[173]), 5(175[174]), 6(176[175]), 7(177[176]), 8(178[177])

III. — CRITICAL-UTOPIAN SOCIALISM & COMMUNISM.

i < 1(179[178]), 2(180[179])

ii < 3(181[180]), 4(182[181]), 5(183[182]), 6(184[183]), 7(185[184]), 8(186[185]), 9(187[186]), 10(188[187]), 11(189[188]), 12(190[189]), 13(191[190]), 14(192[191])

(IV) < 章立てされず、最後の標語とも第III章に繰り込み

削除 < 1(193[192]), 2(194[193]), 3(195[194]), 4(196[195]), 5(197[196]), 6(198[197]), 7(199[198])  
iii < 8(200[199]), 9(201[200]), 10(202[201]), 11(203[202]), 12(204[203])

第3回：第1巻第23号（11月23日付）。第Ⅱ章のすべて。

第4回：第1巻第24号（11月30日付，最終号）。第Ⅲ章のすべて，および第Ⅳ章の（最初の7つの段落を除く）すべて。

#### Ⅳ マクファーレン訳の特徴

##### 1. ハーニーによる〈まえがき〉について

本文を検討する前に，それに先立つ〈まえがき〉を見よう。〈まえがき〉は次のように書かれていた。

「これまでドイツの共産主義者のすべての党派によって採択された以下の『宣言』は，同志チャールズ・マークスおよびフレデリック・エンゲルスによって，1848年1月にドイツ語で作成された。それは，直ちにロンドンにおいてドイツ語で印刷され，二月革命の勃発する数日前に発行された。あの大事件に連なる騒乱のため，当時，『宣言』を文明化されたヨーロッパのすべての言葉に翻訳するという企ては続行することができなくなった。『宣言』の異なる二つのフランス語訳が草稿の形で存在するが，しかしフランスの現在の圧制的な法律のもとでは，それらのいずれの出版も実現不可能である。イギリスの読者は，この重要な文書の，以下の優れた翻訳によって，ドイツの革命家たちのもっとも先進的な党派の諸計画および諸原則を判断することができるであろう。」<sup>49</sup>

編集者のハーニーが執筆したものと考えてよい<sup>50</sup>。下線部（原文はイタリック）の通り，『宣言』の起草者の名が英語読みではあるが，初めて公表されたのであった。

これまで，この〈まえがき〉の内容はマルクスとエンゲルスが同意したものとみなされていた。内容的に両者にしか知り得ないものがあると考えられたこと，また，後の「1851年10月16日付ヨーゼフ・ワイデマイアー宛の手紙」での言及による。この手紙のなかで，マルクスは，ワイデマイアーと同様にアメリカに移住したドイツ系カトリック司祭のコッホに頼まれて，彼に「『宣言』（ドイツ語）20部とその英訳一通とを，ハーニーのまえがき——英語——と一緒に仮綴じ本にしてくれという依頼つきで」送ったと述べているからである<sup>51</sup>。ここで言う英語の「ハーニーのまえがき」とは『レッド・リパブリカン』英訳に先立って記されていた一文であろうから，もしマルクスがこの〈まえがき〉に同意していない場合には，このようにそのままの形で仮綴じ本に再掲載を依頼することは考えられない，というわけである。

また，ハーニーに対して起草・出版の経緯やフランス語訳の状況についてマルクスおよびエンゲ

<sup>49</sup> *The Red Republican*, 9. November, 1850, p. 1/l.

<sup>50</sup> 「1852年3月5日付ヨーゼフ・ワイデマイアー宛マルクスの手紙」において，マルクスははっきりとハーニーが書いたものと述べている（MEW, Bd. 28, S. 503）。なお，サヴィルは，根拠を示さずにこの〈まえがき〉の筆者をエンゲルスの可能性もありうるとしている（Saville, *ibid.*, p. xi/II, footnote 56）。ちなみに，〈まえがき〉を書いたのが訳者本人でないことは，「以下の優れた翻訳」とは言わないであろうことから従来から推測されていたところである。

<sup>51</sup> MEW, Bd. 27, S. 582

ルスから特別の情報提供がなされたのかどうかも問題となる。

## 2. 段落数の減少について

翻訳は23頁本によるものであろう<sup>52</sup>。訳文そのものはおおむね原文に忠実であるが、多少の相違が生じている<sup>53</sup>。

ドイツ語原文と比べて一見して明らかなのは、段落の切り方が大きく異なっていることである。原文の多くの段落がひとまとめにされ、段落数が著しく減っている<sup>54</sup>。

『宣言』は問答体がもとになって起草されたためか、短い段落が数多く連ねられているという特徴がある。

『レッド・リパブリカン』紙は1頁3欄からなり、1行あたりに収録される語数もそれほど多くなく、段落分けが多少増えてもそれほど紙幅が増すとは思われない割り付けであるにもかかわらず、『宣言』ドイツ語原文のこの特徴は再現されていない<sup>55</sup>。

このような段落の切り方がマルクスおよびエンゲルスの要請であったか否かも問題となる。

## 3. 本文の特徴

マクファーレンによる英訳の特徴については、浜林氏が言及すべき諸点をすでに的確に描いている<sup>56</sup>。また、氏が述べるように細かな点を挙げれば際限がない。それゆえここでは、補足的にいくつかのものに限って述べることにする。

### (1) [はしがき] 冒頭文「一つの妖怪がヨーロッパを歩き回っている」について

マクファーレンの英訳でもっとも言及されることの多いのは『宣言』の冒頭文である。行論の便宜から続く一文も掲げる。

原独文は、

Ein Gespenst geht um in Europa — das Gespenst des Kommunismus. Alle Mächte des alten Europa haben sich zu einer heiligen Hetzjagd gegen dies Gespenst verbündet, der Papst und der Czar, Metternich und Guizot, französische Radikale und deutsche Polizisten.

<sup>52</sup> その根拠は、23頁本と30頁本とを区別する際の指標として服部文男が指摘した三つの箇所（服部「『共産党宣言』の誕生」『マルクス探索』新日本出版社、1999年、111/112頁〔初出は『経済』第29号、新日本出版社、1998年2月〕）のうち最初の二つがいずれも23頁本に一致しているからである。また第三の点は両者と異なる独自のものとなっているが、23頁本の誤植を適切に訂正しているためであり、マクファーレンの原文理解の浅くないことを示していると見てよい。

<sup>53</sup> 原テキストとの対照は、vgl. Andréas, *ibid.*, p. 26, p. 340/341.

<sup>54</sup> 双方の段落の対応関係は上掲の「表1」の通りである。両者の、さらには1888年版との比較対照には、著者自身の改定訳も付記された Draper, *ibid.*, Part II: Parallel Texts, pp. 110-191も便宜である。

<sup>55</sup> 逆に、原文ではひと続きの段落であったものが、二つの段落に分けられた所が三カ所ある。第I章第4段落、第II章第9段落および第18段落である（「表1」を参照）。この段落切りの相違が掲載媒体の相違から生じた単なる技術的なものにすぎないのか、あるいはそれ以外のなんらかの理由があるのか、今のところ詳らかではないが、結果だけを見れば、問答体の母斑を脱した構成の一つの試みと見ることもできよう。

<sup>56</sup> 浜林、前掲書、150-154頁。

マクファーレンの英訳は、

A frightful hobgoblin stalks throughout Europe. We are haunted by a ghost, the ghost of Communism. All the Powers of the Past have joined in a holy crusade to lay this ghost to rest, — the Pope and the Czar, Metternich and Guizot, French Radicals and German police agents.

1888年のサミュエル・ムーアによるエンゲルス校閲訳は、

A spectre is haunting Europe — the spectre of Communism. All the Powers of old Europe have entered into a holy alliance to exorcise this spectre; Pope and Czar, Metternich and Guizot, French Radicals and German police spies.

三者を比較してみると、マクファーレン訳の特徴は以下の諸点にある。1) 冒頭文をエムダッシュの前後で二つの文に分けて訳出したこと、2) その前半部を移した一文では *Gespenst* に *frightful hobgoblin* を充てたこと、3) 後半部に当たる一文は、直訳することなく意識し、そこでの *Gespenst* には *ghost* の語を充て、動詞 *haunt* で受け、受動形にしていること、——以上である。

3) のうち、エムダッシュの後半部で *Gespenst* に、前半部と同じ *hobgoblin* を充てずに、*ghost* を充てたのは同一語の重複を嫌う欧文の一般的特徴であろう。主語・動詞の対応についていえば、一般的な対応は、*ghost* ならば *haunt*、*spectre* ならば *stalk* であろう<sup>57</sup>から、この対応を乱している1888年のエンゲルス校閲ムーア訳よりも優れている。

また、マクファーレンが *haunt* を受動形で、意識しているのは、彼女の書き癖ないしは文体上の好みということであろう。マクファーレンは『デモクラティック・レビュー』に3回連載で執筆したカーライル批判論説「民主主義論」の第3回目においてこう書いている。

「われわれは古い死んだ諸国家および諸文化という幽霊どもにつきまとわれている…… (We are haunted by the ghosts of old dead nations and cultures, …….)」<sup>58</sup>

すでにこのような表現が彼女のものとしてあったのである。ここで彼女は、*ghost* および *haunt* という語を用いて、現実の発展を押し留める反動的・保守的機能を表現しているが、すでにこのような表現があつてみれば、現状を変革しようとする機能を果たすべき共産主義を含意する語としての *Gespenst* を英訳する場合、その機能は正反対ではあるが、同じ受動態の言い回しを使ったのではないかと思われるのである。

2) の点、*Gespenst* の独特の英訳は一般には不評のようである。とはいえ、『宣言』の冒頭段落は、続く二番目の一文にも見られる通り、第5段落と呼応して、*Gespenst*, *umgehen*, *heilige Hetzjagd gegen dies Gespenst* といった用語の組み合わせによる「共産主義の妖怪というおとぎ話」の隠喩として書かれている。適切な用語選択であつたかどうかはともかくも<sup>59</sup>、この隠喩を英文においても

<sup>57</sup> Terrell Carver, Re-translating the Manifesto: New Histories, New Ideas, *The Communist Manifesto. New Interpretations*, Edited by Mark Cowling, Chapter 2, New York 1998, pp. 55/56.

<sup>58</sup> Helen Macfarlane, Democracy. Remarks on the Times, Apropos of Certain Passages in No. 1, of Thomas Carlyle's "Latter-Day Pamphlets.", *The Democratic Review*, Vol. II, No. 1, June, 1850, p. 12.

<sup>59</sup> 「私の翻訳は、1888年の英語版以来初めて本当に新たに一行一行やり直された翻訳である。1960年代以来この方なされた多くの新たな版本には翻訳に差異があるにせよ、(それ自体変化を経てきた) ドイツ語の諸テキストに目を通し、その思想を現代の読者のために練り直した真剣な試みであると筆者がみなせるようなも

生かそうとした彼女の試みの一端が *frightful hobgoblin* という語に現れていると見なければならぬ。

なお、この点については、翻訳の適切さという観点からだけではなく、1848年革命の敗退が次第にはっきりとしてきて、反動が最高度に強まっている1850年において、『宣言』刊行時の「旧ヨーロッパのすべての権力が、この妖怪を狩りたてるという神聖な仕事のために、同盟を結んでいる」という生々しい現実がより一層強くを実感されて、*We are haunted by the ghosts of old dead nations and cultures* とすでに表現していたマクファーレンと、それから40年を経た後にそうした事情はかなり薄らいだ段階で英訳に従事したサミュエル・ムーアとの落差という見地からも考慮されるべきではなかろうか。<sup>60</sup>

## (2) 本文冒頭文「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」について

### 1) マクファーレン訳の限度

原独文は、

Die Geschichte aller bisherigen Gesellschaft ist die Geschichte von Klassenkämpfen.

マクファーレンの英訳は、

Hitherto the history of Society has been the history of the battles between the classes composing it.

1888年のサミュエル・ムーアによるエンゲルス校閲訳は、

The history of all hitherto existing society is the history of class struggles.

原独文は、sein 動詞を繫辞として現在時制で用いて、A=B という命題の形式で書かれている。主語部分には形容詞 *all* による修飾がある。ムーア訳はこれらを踏襲するとともに、述部の *Klassenkampf* をも逐語的に *class struggle* で置き換えて、原文に忠実な訳である。

一方、マクファーレン訳は、主語部分では形容詞 *all* を用いず、現在完了形を利用して現在に至るまでの事実の継続として表現している。

原独文、ムーア訳とも、客観的な既定の命題の提示といった印象を受けるのに対して、マクファーレン訳からは書き手の現時点における生々しい経験を語っているような印象を受ける。述語部分でも *Klassenkämpfen* に *the battles between the classes composing it* と、*composing it* を補足して訳しているのもそれに対応しているように思われる。

両英訳とも「これまでのすべての社会の歴史は階級闘争の歴史である」という階級闘争史観を端的に表現する一文の意味は伝えているが、マクファーレン訳の場合は、それが証明された既定の命題であり、以下では新たな別の事柄を展開し解明してゆくというよりも、これから証明することになる事実の提示のようにも受け取れる。次の段落からの一続きも、原独文とムーア訳では、提示した規定の命題の単なる例示であるのに対して、マクファーレン訳はその例証となる。

---

のではない」(Carver, *ibid.*, p. 51) と述べるカーヴァーはこう評している。「最初の英訳はヘレン・マクファーレンによってなされ、1850年11月後半に『レッド・リパブリカン』に掲載され、復刻(London, Merlin Press, 1966)された。この訳文は *awful* な最初の一文、'A Frightful hobgoblin stalks throughout Europe' でもつばら有名である。」(*ibid.*, p. 62, note 2.)。

<sup>60</sup> Vgl. auch D. Black, *ibid.*, p. 94.

実のところ、『宣言』においては、冒頭で提示した階級闘争史観の正しさはとりわけフランスの王政復古期の歴史家たちの諸業績によって証明済みのことであり<sup>61</sup>、第I章の内容の展開の大前提としてその冒頭に置かれている。第I章で新たに証明されていることは、まず前半ではブルジョアジーがこの階級闘争をどのように闘ったのか、そして勝利したのか、また、後段ではプロレタリアートがどのように戦い勝利していくことになるのかを、フランス王政復古期の歴史家たちのようにいわば政治史の次元で語るのではなく、その基礎にあるいわば経済史の次元での事柄を、とりわけグスタフ・フォン・ギュリッヒ（Gustav von Gulich）の諸業績に学びながら<sup>62</sup>、解き明かし証明しようとしたのである。『宣言』第I章の新しさはまさにここにあり、唯物論的歴史観の一端をなす見地である。

このような『宣言』第I章理解からすれば、その冒頭文の英訳はやはりドイツ語原文に忠実なムア訳のように、A=Bという命題の形式で移されるのが自然である。マクファーレンは、『宣言』第I章が上記のようなものとして書かれていることについての認識をまだ欠いており、現在完了時制の書き手の実感を記すような行文になったものと思われる。マルクスおよびエンゲルスが1845年に手稿『ドイツ・イデオロギー』において端緒的に確立し、それを初めて近代史に適用して1848年に起草された『宣言』の突出した新たな見地は、そのまだ二年後にあっては、優れたジャーナリストであったマクファーレンをもってしても十分に捉えきることができなかった一証左であると言っ

## 2) D. ブラックの錯誤

なお、ここでD. ブラックの錯誤を指摘しておきたい。D. ブラックの著書の付録Bはマクファーレン英訳の再録である。しかしながら、そこには、1)『宣言』第I章の見出しが欠けており、2)今見た冒頭文も欠けている<sup>63</sup>。そして、該当箇所に注2を付して、「章題目「ブルジョアとプロレタリアたち」が欠けており、また第一段落の冒頭にある文章「これまでのすべての社会の歴史は、階級闘争の歴史である」も欠けている……」<sup>64</sup>と記している。また、彼が『宣言』マクファーレン英訳の特徴を「第一に」と以下数え上げている本文の行論中にもこうある。

「第三に、最初の章の表題「ブルジョアとプロレタリア」が欠けており、また本章の最初の文章「これまでのすべての社会の歴史は、階級闘争の歴史である」も欠けている。これは驚くべき脱落である。というのは、われわれがすでに見たように、マクファーレンはこの見地に大きな意義を置いていたからである……。」<sup>65</sup>

そもそもブラックも参照しているショイエンの著書の207頁の対頁となる口絵写真に『レッド・リパブリカン』の英訳の最初のページが掲載されているが、ブラックが欠けているとする上記の2

<sup>61</sup> さしあたり拙稿「階級闘争史観の起源——フランス復古王政期の歴史家についてのプレハーノフの所説——」『マルクス・エンゲルス・マルクス主義研究』第50号、八朔社、2009年1月、111-122頁参照。

<sup>62</sup> 渋谷正「マルクスの「ギューリヒ抜粋」をめぐる」服部文男・佐藤金三郎編『資本論体系 第1巻 資本論体系の成立』有斐閣、2000年12月を参照。

<sup>63</sup> *Ibid.*, p. 138.

<sup>64</sup> *Ibid.*, p. 170.

<sup>65</sup> *Ibid.*, p. 92.

点が、そこにはっきりと見て取れる。また、同じくブラックが読み、その著書でたびたび参照を求めているドレイパーの著書の付録におけるマクファーレンによる英訳の再録にもこの2つは欠けることなく掲載されている。そしてなにより、ブラック自身がその著作8頁の叙述でこのマクファーレン英訳から第I章冒頭の章句を引用してさえているのである。

ブラックはなぜこうしたことに気付かなかったのか謎であるが、おそらく、付録作成の際の脱落から、それを自身の誤りではなく、『宣言』英訳自体がそうであると思ひ込み、すでに本文でははじめ正確な記述をしていたにもかかわらず、急遽英訳の特徴の一つとして挙げることになったのではなからうか。本文の行文中には「第二に」という字が見えないので、なんらかの原稿の調整等での錯誤があり、このような結果となったことが窺われるのである。

### (3) 第三章への三つの脚注の追加について

最終回掲載分(第三章と第四章に相当)に「訳者注記」が脚注形式で三つ、いずれも第三章「社会主義的および共産主義的文献」のそれぞれの箇所、加えられている。

一つ目は、第1節「反動的社会主義」のb項「小ブルジョア的 (Kleinbürgerlich) 社会主義」の表題が、英訳で「ショッポクラート (Shopocrat) 社会主義」と訳されたことに関してである。

「この言葉は原語ではクラインビュルガー (Kleinbürger[ママ])である。それは『小ブルジョア』あるいは『市民』を意味する。この階級は、小農園主であれ小工場主であれ小売店主 (retail shopkeepers) であれ、一般に小資本家からなる。これらのうちで最後のものがイギリスにおけるこの階級の支配的な要素を形成しているので、私は、そのドイツ語を表現するためにショッポクラートという言葉を選んだ。」<sup>66</sup>

二つ目は、同節c項「ドイツ社会主義または真正社会主義」の段落へのもので、「真正」という言葉に関してである。

「もし読者がこの節を注意深く研究されたあとで、この名称に同意されない場合、それは決して『宣言』の筆者たちの咎ではない。」<sup>67</sup>

三つ目は、第3節「批判的・ユートピア的社会主義および共産主義」の最後の段落にこうある。

「これらの章句は二月革命以前に書かれたのであって、これらの例は当時の諸党派の状態に関するものである、ということが忘れられてはならない。」<sup>68</sup>

---

<sup>66</sup> *Red Republican*, p. 189/II, Translator's Note. ヘレン・マクファーレンの筆名であるとされるハワード・モートン名義の『レッド・リパブリカン』1850年10月12日付所載論説「民主・社会共和国」中に“England, - this shopkeeping country of middleclass” (Howard Morton, *The Democratic and Social Republic*, *Red Republican*, p. 131/II) という表現が見られるのであって、少なくとも同紙の寄稿者および読者においては共通の認識であったことが分かる。D. ブラックは、1830年代以来、チャーティストのサークルで用いられていた言葉であると述べている (*ibid.*, p. 94)。ちなみに、SOEDによれば、shopocrat noun & adjective (a member) of the shopocracy M19. とあり、shopocracyを見ると、shopocracy / ʃɒˈpɒkrəsi/ noun. Now rare. M19. [ORIGIN from shop noun + -o- + -cracy.] Shopkeepers as a class aspiring to social importance; a wealthy or influential body of shopkeepers. となっている。したがって、もっと広く、19世紀半ばのイギリスにおいて一般的な語であったと見てよいようである。

<sup>67</sup> *Red Republican*, p. 189/III, Note of the Translator.

<sup>68</sup> *Ibid.*, p. 190/III, Note of the Translator.

これら三つの脚注の新たな付加が、マクファーレンないしはハーニーによって独自になされたものか、あるいはマルクスおよびエンゲルスの側からの指示であったのかが問題となる。

#### (4) 二三の訳語の特徴について

##### 1) 「党」の意味に相当する訳語

「表2.『共産党宣言』各版における「党」の意味の諸〔訳〕語」<sup>69</sup>を参照されたい。この「表2」のうちNo. 4, 5/6, 7, 8, 20に見られる通り, Partei はもっぱら party と英訳されている。No. 9は section が充てられているが, これは直前の段落において既に party が用いられており, 語の重複を避けるためであるとするべきである。上記のいずれにおいても party は政治的党派(政党)として正確に把握されている。したがって, 当時のイギリスにおいても, このような文脈における party は政党として明瞭に理解されていたことが分かる。

No. 20で demokratische Partei が revolutionary party と英訳されているのが目につく。マクファーレンおよび1850年時点でのチャーティスト, 特にレッド・リパブリカンの人々の democratic 理解が窺われる。とはいえ, もしエンゲルスの助言があったとするならば, 9月15日の同盟の分裂以降であるだけになおさら手直しが入ったことであろう。

##### 2) 「搾取」の訳語は using up

すでに浜林氏が述べている事柄である<sup>70</sup>。「表3.『共産党宣言』各版における「搾取」等の意味の諸〔訳〕語」を参照されたい。見られるように, 『宣言』中には「搾取」と邦訳されてよい語が20カ所ほどある。これらのうち資本主義社会におけるブルジョアによる経済的搾取を述べたのは10カ所ほどである。そのうちのほとんどがマクファーレンによって use up か using up あるいは using-up と英訳されており, ほんのわずかの箇所だけで exploitation が用いられている。

一般に経済的搾取を英語で表現する場合には, 当時 sweating system (苦汗労働制度)を用いる場合が多かったし, 時期的には少し先立つがリカード派社会主義者たちの場合は extract などが用いられている。したがって, use up を用いるこのような英訳はマクファーレン訳の特徴と言ってよい<sup>71</sup>。

##### 3) 「交易」の訳語

「表4.『共産党宣言』各版における「交易」と邦訳できる諸〔訳〕語」を参照されたい。ここから見てとれるマクファーレン訳の特徴は次の3点である。

まず, 「表4」のNo. 8, [9,] 12, 15, 16に見られる通り, Produktionsmittel と対になる Verkehrsmittel の Verkehr の部分 はもっぱら traffic と訳出されている。マクファーレンは生産と対になる流通をイ

<sup>69</sup> 「表2」～「表4」において, 邦訳を示した列にあるのは服部文男訳『共産党宣言／共産主義の諸原理』新日本出版社〔科学的社会主義の古典選集〕1989年の訳文であり, Draper とある列に示した段落番号は Draper, *ibid.*, Part II: Parallel Texts, pp. 110-191にある段落番号である。

<sup>70</sup> 浜林, 前掲書, 146頁および151頁。そこで氏はすでに「搾取」をマクファーレンがもっぱら “using up” と英訳していることを指摘されている。

<sup>71</sup> マクファーレンおよびモートンの諸論説では各所で use up が用いられている。いくつかの箇所を繁瑣を避けるために掲載誌・紙と頁数のみ記す。*The Democratic Review*, Vol. I, p. 450, Vol. II, p. 11, p. 48; *The Red Republican*, p. 27/I, p. 102/III, p. 103/I, p. 163/II.

表2：『共産党宣言』各版における「党」の意味の諸【訳】語

No.	章、 節、 項	段落 番号	Draper 番号	邦訳	頁	1848年初版23頁本（原独語文）	S.	1850年マクファアレーン英訳	p./c.	1888年エンゲルス校閲ムーア英訳	p.
1		2	2	<b>野党</b>	47	<b>Oppositionspartei</b>	[3]	<b>the opposition</b>	161/I	<b>the party in opposition</b>	7
2		2	2	<b>野党</b>	47	<b>Oppositionspartei</b>	[3]	<b>the opposition</b>	161/I	<b>the Opposition</b>	7
3		5	5	<b>党みずからの宣言</b>	47	ein Manifest der Partei selbst	[3]	a manifesto of the Communist Party	161/II	a Manifesto of the party itself	7
4	I	41	47	プロレタリアの階級への、したがってまた <b>政党</b> へのこの組織化	65	Diese Organisation der Proletarier zur Klasse, und damit zur politischen Partei	9	This organisation of the Proletarians into a class, and therewith into a political party	171/II	This organisation of the proletarians into a class, and consequently into a political party	14
5	II	2	62	共産主義者は、他の労働者 <b>諸党</b> に 対立する特殊な <b>党</b> ではない。	71	Die Kommunisten sind keine besondere Partei gegenüber den andern Arbeiterparteien.	11	The Communists form no separate party in opposition to the other existing working-class parties.	181/III	The Communists do not form a separate party opposed to other working-class parties.	16
6	II	2	62		71		11		181/III		16
7	II	5	65	他のプロレタリア的 <b>諸党</b>	71	den übrigen proletarischen Parteien	11	the various sections of the Proletarian party	181/III	the other working class parties	16
8	II	6	66	すべての国々の <b>労働者諸党</b> のもつとも 断固とした、絶えず推進してゆく部分	72	der verschiedenste immer weiter treibende Theil der Arbeiterparteien aller Länder	11	the most advanced, the most progressive section, among the Proletarian parties of all countries	181/III	the most advanced and resolute section of the working class parties of every country	16
9	II	7	67	すべての他のプロレタリア的 <b>諸党</b>	72	der aller übrigen proletarischen Parteien	11	all other Proletarian sections	181/III	all the other proletarian parties	17
10	III,1,c	18	169	あらゆる階級闘争を超越する <b>非党派</b> 的なその高尚さを	98	seine unparteiische Erhabenheit über alle Klassenkämpfe	20	their own sublime indifference towards all class-antagonism	190/I	its supreme and impartial contempt of all class struggles	27
11	III,3	12	189	反動的な <b>党派</b> を形成する	104	reaktionäre Sekten	22	formed reactionary sects	190/III	formed mere reactionary sects	29
12	IV	表題		種々の反政府 <b>党</b> にたいする共産主義者の立場	106	Stellung der Kommunisten zu den verschiedenen oppositionellen Parteien	22	この表題削除	(190/III)	POSITION OF THE COMMUNISTS IN RELATION TO THE VARIOUS EXISTING OPPOSITION PARTIES	30
13	IV	1	192	すでに組織された <b>労働者諸党</b> にたいする共産主義者の関係、したがってイギリスにおけるチャーティストおよび北アメリカにおける農業改革者とのその関係	106	das Verhältniß der Kommunisten zu den bereits konstituirten Arbeiterparteien [.....], also ihr Verhältniß zu den Chartisten in England und den agrarischen Reformern in Nordamerika	22	この段落削除	(190/III)	the relations of the Communists to the existing working class parties, such as the Chartists in England and the Agrarian Reformers in America	30
14	IV	2	193	社会的民主主義の <b>党</b>	106	die socialistisch=demokratische Partei	23	この段落削除	(190/III)	the Social-Democrats	30
15	IV	3	194	この <b>党</b> が	107	diese Partei	23	この段落削除	(190/III)	this party	30
16	IV	4	195	～する <b>党</b> を	107	Partei, welche [.....]	23	この段落削除	(190/III)	the party that [.....]	30
17	IV	4	195	～同じ <b>党</b> を	107	eine selbe Partei, welche [.....]	23	この段落削除	(190/III)	that party which [.....]	30
18	IV	5	196	共産主義者の <b>党</b>	107	die kommunistische Partei	23	この段落削除	(190/III)	they (= the communists)	30
19	IV	6	197	それは（＝共産主義者の <b>党</b> ）	107	Sie (= die kommunistische Partei)	23	この段落削除	(190/III)	they (= the communists)	30
20	IV	10	201	すべての国々の民主主義的 <b>諸党</b> の	109	der demokratischen Parteien aller Länder	23	the revolutionary parties	190/III	the democratic parties	31

表3：「共産党宣言」各版における「搾取」等の意味の語【訳】語

No.	章 節 項	段落 番号	通し 番号	Drapeer	邦訳	頁	1848年初版23頁本（原独文）	S.	1850年マクワアレーン英訳	p./c.	1888年エンゲルス校閲ムーア英訳	p.
1	I	14	20	20	ブルジョアは、宗教的および政治的な諸幻想でおおい隠された搾取の代わりに、あらわな、恥しからずの、直接的な、あけすけな搾取をかかげたのである。	53	Sie hat [...] an die Stelle der mit religiösen und politischen Illusionen verhüllten Ausbeutung die offene, unverschämte, direkte, dürre Ausbeutung gesetzt.	5	the Bourgeoisie substituted shameless, direct, open spoliation, for the previous system of spoliation concealed under naked, shameless, direct brutal exploitation.	162/1	for <b>exploitation</b> , veiled by religious and philosophical illusions, it [the bourgeoisie] has substituted naked, shameless, direct brutal <b>exploitation</b> .	9
2	I	14	20	53		5		162/1		9		
3	I	20	26	26	世界市場の開拓によって	55	durch die <b>Exploitation</b> des Weltmarkts	5	Through their [the Bourgeoisie] <b>command</b> of a universal market	162/1	through its [the bourgeoisie] <b>exploitation</b> of the world-market	10
4	I	27	33	33	古い諸市場をいっそう徹底的に利用することによって	59	durch [...] die gründlichere <b>Ausbeutung</b> der alten Märkte	7	by [...] <b>using up</b> the old ones [markets] more thoroughly	162/III	by the more thorough <b>exploitation</b> of the old ones [markets]	12
5	I	34	40	40	工場主による労働者の搾取が終わって	62	Ist die <b>Ausbeutung</b> des Arbeiters durch den Fabrikanten so weit beendet	8	has been so far accomplished by the mill-owner	171/1	No sooner is the <b>exploitation</b> of the labourer by the manufacturer, so far, at an end	13
6	I	37	43	43	彼らを直接に搾取る個々のブルジョアにたいして	62	gegen den einzelnen Bourgeois, der sie direkt <b>ausbeutet</b>	8	against the individuals of the middle-class who directly <b>use</b> them [workmen] <b>up</b>	171/1	against the individual bourgeois who directly exploits them [the proletarian]	13
7	II	13	73	73	他人による人の搾取にもとづいた	73	die auf der <b>Ausbeutung</b> der Einen durch die Andern beruht	11	on the <b>using up</b> of the many by the few	181/III	on the <b>exploitation</b> of the many by the few	17
8	II	18	78	78	賃労働を搾取る財産	74	das Eigentum, welches die Lohnarbeit <b>ausbeutet</b>	12	a species of property which <b>plunders</b> Wages-labour	182/1	that kind of property which <b>exploits</b> wage-labour	17
9	II	18	78	78	これを新たに搾取る	74	um sie von Neuem <b>auszubeuten</b>	12	to <b>use</b> it [a new supply of Wages-labour] <b>up</b> anew	182/1	for fresh <b>exploitation</b>	17
10	II	43	103	103	両親による子どもの搾取	79	die <b>Ausbeutung</b> der Kinder durch ihre Eltern	14	the <b>using up</b> of children by their parents	182/II	the <b>exploitation</b> of children by their parents	19
11	II	47	107	107	生産用具が共同で利用されるべき	80	die Produktions=Instrumente gemeinschaftlich <b>ausbeutet</b> werden sollen	14	the instruments of production are to be <b>used up</b> in common	182/II-III	the instruments of production are to be <b>exploited</b> in common	20
12	II	56	116	116	一個人の他の個人による搾取	82	die <b>Exploitation</b> des einen Individuums durch das andere	14	the <b>using up</b> of one individual by another	182/III	the <b>exploitation</b> of one individual by another	20
13	II	56	116	116	一国民の他国民による搾取	82	die <b>Exploitation</b> einer Nation durch die andre	14	the <b>using up</b> of one nation by another	182/III	the <b>exploitation</b> of one nation by another	20
14	II	66	126	126	社会の一部分の他の部分による搾取	83	die <b>Ausbeutung</b> des einen Theils der Gesellschaft durch den andern	15	the <b>using up</b> of one part of society by another part	183/1	the <b>exploitation</b> of one part of society by the other	21
15	II	73	133	133	土地所有の収奪	85	<b>Expropriation</b> des Grundeigentums	16	The national <b>appropriation</b> of the land	183/1	<b>Abolition</b> of property in land	22
16	III,1,a	1	136	136	ただ搾取されている労働者階級の利益のためにだけ	88	nur noch im Interesse der <b>exploitirten</b> Arbeiterklasse	17	as advocates for the <b>used-up</b> Proletarians	189/1	in the interest of the <b>exploited</b> working-class alone	23
17	III,1,a	5	140	140	封建的な人々は、彼らの搾取様式がブルジョアの搾取とはちがった姿をしていたと証明するが、彼らが多量に異なったいまだでは時代おくれとなった諸事情および諸条件のもとで搾取したということ	89	Wenn die Feudalisten beweisen, daß ihre Weise der <b>Ausbeutung</b> anders gestaltet war als die bürgerliche <b>Ausbeutung</b> , so vergessen sie nur, daß sie unter gänzlich verschiedenen und jetzt überlebten Umständen und Bedingungen <b>ausbeuten</b> .	17	When the Feudalists show that their mode of <b>exploitation</b> ( <i>using up one class by another</i> ) was different from the Bourgeois mode, they forget that their mode was practicable only under circumstances and conditions which have passed away — never to return.	189/1	In pointing out that their mode of <b>exploitation</b> was different to that of the bourgeoisie, the feudalists forget that they <b>exploited</b> under circumstances and conditions that were quite different and that are now antiquated.	23
18	III,1,a	5	140	140	を忘れていただけなのである	89		17				23
19	III,1,a	5	140	140		89		17				-

表4：『共産党宣言』各版における「交易」と邦訳できる諸「訳」語

No.	章、節、項	段落番号	通し番号	Draper	邦訳	頁	1848年初版23頁本（原独文）	S.	1850年マクフアラーレン英訳	p./c.	1888年エングルス校閲ムーア英訳	p.
1	1	7	13	13	諸植民地との <b>交易</b> 、 <b>交換</b> 手段（貨幣）および商品一般の増加	50	der <b>Austausch</b> mit den Kolonien, die Vermehrung der <b>Faeschmittel</b> und der Waaren überhaupt	4	the Colonial <b>Trade</b> , the increase of commodities generally and of the means of <b>exchange</b>	161/III	<b>trade</b> with the colonies, the increase in the means of <b>exchange</b> and in commodities generally	8
2	1	7	13	13	同上	50	同上	4	同上	161/III	同上	8
3	1	10	16	16	陸上 <b>交通</b>	51	den Land <b>kommunikationen</b>	4	in the modes of <b>communication</b>	161/III	<b>communication</b> by land	9
4	1	11	17	17	生産様式および <b>交易</b> 様式における	51	in der Produktions- und Verkehrsweise	4	in the modes of Production and <b>Exchange</b>	161/III	in the modes of production and of <b>exchange</b>	9
5	1	14	20	20	アルジョアジーは、個人の品位を <b>交換</b> 価値に解消して	53	Sie hat die persönliche Würde in den <b>Faeschwerth</b> aufgelöst	5	They changed personal dignity into <b>market</b> value	162/I	It has resolved personal worth into <b>exchange</b> value	9
6	1	20	26	26	諸国民相互の全面的な <b>交易</b> 、全面的な依存	55	ein allseitiger <b>Verkehr</b> , eine allseitige Abhängigkeit der Nationen von einander	5/6	a universal <b>intercourse</b> , an inter-dependence, amongst nations	162/II	we have <b>intercourse</b> in every direction, universal inter-dependence of nations	10
7	1	21	27	27	すべての生産用具の急速な改善により、かざりなく容易になった <b>交通</b> によって	56	durch die rasche Verbesserung aller Produktions-Instrumente, durch die unendlich erleichterten <b>Kommunikationen</b>	6	Through the incessant improvements in machinery and the means of <b>locomotion</b>	162/II	by the rapid improvement of a instruments of production, by the immensely facilitated means of <b>communication</b>	10
8	1	25	31	31	生産手段および <b>交易</b> 手段	57	Die Produktions- und Verkehrsmittel	6	these means of production and <b>traffic</b>	162/II	the means of production and of <b>exchange</b>	11
9	1	25	31	31	生産手段および <b>交易</b> 手段	57	Produktions- und Verkehrsmittel	6	these means [of production and <b>traffic</b> ]	162/II	these means of production and of <b>exchange</b>	11
10	1	25	31	31	封建社会がそのなかで生産し <b>交換</b> した諸関係	57	die Verhältnisse, worin die feudale Gesellschaft producirt und <b>austauschte</b>	6	the arrangements under which feudal society produced and <b>exchanged</b>	162/II	the conditions under which feudal society produced and <b>exchanged</b>	11
11	1	27	33	33	アルジョアジー的な生産諸関係および <b>交易</b> 諸関係、アルジョアジー的な所有諸関係	58	Die bürgerlichen Produktions- und Verkehrs-Verhältnisse, die bürgerlichen Eigenthums-Verhältnisse	6	(…削除…) the conditions of property	162/II	its relations of production, of <b>exchange</b> and of property	11
12	1	27	33	33	これほど巨大な生産手段および <b>交易</b> 手段	58	die so gewaltige Produktions- und Verkehrsmittel	6	such colossal means of production and <b>traffic</b>	162/III	such gigantic means of production and of <b>exchange</b>	11
13	1	40	46	46	大工業が生み出して、種々の地方の労働者たちを互いに結びつける <b>交通</b> 手段の増大によって	64	durch die wachsenden <b>Kommunikationsmittel</b> , die von der großen Industrie erzeugt werden und die Arbeiter der verschiedenen Lokalitäten mit einander in Verbindung setzen	9	by the facility of <b>communication</b> under the modern industrial system, whereby the Proletarians belonging to the remotest localities are placed in connection with each other	171/II	by the improved means of <b>communication</b> that are created by modern industry, and that place the workers of different localities in contact with one another	14
14	III,1,a	8	143	143	誠実、愛、名譽を、羊毛、テンシイおよび火酒に掛け値で <b>交換</b> する	90	Treue, Liebe, Ehre mit dem Schacher in Schaafrswolle, Runkerruben und Schnapps zu <b>vertauschen</b>	17	to give up chivalry, true love, and honour <b>for the traffic</b> in wool, butcher's meat, and corn	189/II	to barter truth, love, and honour <b>for traffic</b> in wool, beetroot-sugar, and potato spirit	23
15	III,1,b	5	150	150	古い生産手段および <b>交易</b> 手段	92	die alten Produktions- und Verkehrsmittel	18	the old modes of production and <b>traffic</b>	189/II	the old means of production and of <b>exchange</b>	24
16	III,1,b	5	150	150	近代的生产手段および <b>交易</b> 手段	92	die modernen Produktions- und Verkehrsmittel	18	the modern means of production and <b>traffic</b>	189/III	the modern means of production and of <b>exchange</b>	24

メージしているようであり、より広義の感のあるムーア訳の語 exchange と比べれば確かに信用制度等捉え損ねるものも出てきはするものの、当時、大陸では本格的な産業革命が開始される中で、比較的正確な把握をしているのではなかろうか。それが直接に現れているのが「表4」中の No. 7 の Kommunikation を極めて具体的に the means of locomotion と訳している箇所である。

次に、生産、交易および所有の三つの諸関係のひとまとまりを、最後の所有諸関係に集約させて理解し、conditions of property とのみ訳している No. 11 である。後の『経済学批判』「序言」中の“唯物論的歴史観の定式”にあるような生産諸関係の総体の法律的表现が所有であるという含みをマクファーレンがすでに理解していたからというよりも、むしろ先に第I章冒頭文の訳出について述べた通り、唯物論的歴史観への十分な理解が彼女に欠けていたことを示すもののように思われる。三つの諸関係を所有諸関係にのみ集約して訳出してしまうと、結果として訳文に三つの諸関係の関連についての含みが出てこないうらみが残るからである。

さらに、「表4」中 No. 5 の Tauschwerth に market value を充てたことである。当時すでにイギリス古典経済学においては exchange value という語は定着しており、単語 Tauschwerth はそのドイツ語訳なのであった。後のムーア訳のようにそれを用いていない点に、マクファーレンに経済学への素養が欠けていたことが窺われるのである。したがって、もし訳稿へのエンゲルスの細かな助言があったとするならば、彼は看過することなく exchange value への変更を指示していたことであろう。

#### 4. 省略・削除された部分について

前掲の「表1」に見られる通り、いくつかの部分削除されている。『宣言』の国際的性格が語られ、ヨーロッパの主な言語への翻訳の企てが記されている〔はしがき〕の最後の段落と、第IV章「種々の反政府党にたいする共産主義者の立場」の表題ならびに最初の7つの段落と、である。

二月革命の退潮に起因する状況の変化に鑑みれば、当然の削除とも考えることができるが、それについては、『宣言』第三章のみが再録された『新ライン新聞。政治経済評論』第5・6合冊号について考察し、比較してみるのが便宜である。

『評論』第5・6合冊号において第三章だけが部分再録されたのには以下の三つの要因が考えられる。

第一は、二月・三月革命を経て1848年革命敗北による大陸における情勢の激変である。

革命の帰趨が明確になった時期での発行であり、特に革命の敗北はドイツのブルジョアジーの臆病さからくる裏切りとマルクスらは把握していただけに、ブルジョアジーをポジティブに評価している『宣言』第I章の前半の経済史的部分はドイツにおいては相当の変更を加えない限り再録しにくいものであったろう。実際、革命の過程で「賃労働と資本」が『新ライン新聞』に連載されるが、そのなかで資本・賃労働の対抗関係がはっきりと表明されるのもこの理由によるであろう。第IV章の部分も革命前夜のヨーロッパ各国の政治情勢分析とそれに基づく革命路線の提示であるから、1850年後半においてそのまま公表するのはほとんど意味がないことであろう。<sup>72</sup>したがって、『宣言』

<sup>72</sup> この時期の状況把握については Michael Levin, *Deutsch Marx: Marx, Engels, and The German Question*, *Political*

全4章中で1850年11月時点においても再公表に意味があるのは第I章の後半部分、第II章および第III章ということになる。とはいえ、第I章の後半部分も革命を経験して後は、あまりに当然の内容ということになる。第II章は依然有効である。しかしながら、第I章の後半部分の内容も含めて、第II章の内容は、マルクスが『評論』第1号から第3号に発表した「1848~1849年」（後に『フランスにおける階級闘争』）の中で発展された形で受け継がれており、これも改めて公表すれば内容的な重複、ないしは特に労働者階級の独裁の見地の明示いかんという点では理論的後退ということになる。すると、内容面から見直すと、第III章のみが公表可ということになる。

第二は、技術的な理由である。確かに当時の同盟内における『宣言』に対する需要からすれば、そして直後の1850年末/1851年初にケルンにおいて30頁本が作成されたであろうことをも勘案すれば、全文が再録されてもよかったかもしれない。しかしながら、『評論』は第5号と第6号との合冊号となった。紙幅の制約があったし、書店との契約上、1850年前半分の第6号までの発行が義務付けられていた。販売の観点からもドイツ各国の検閲当局に制約される内容は再録を避ける必要もあったであろう。

第三は、運動上の理由である。1850年9月15日の同盟の分裂と亡命者の革命遊びがあっただけに、これらの分派・党派とはまったく異なる理論的・思想的・実践的立場をとるものであることを『宣言』第III章の再録によって示す一層積極的な理由があったであろう。

このことを物語るのは、大分後の史料であるが、エンゲルスの『フランスにおける階級闘争』「序文」の一節である。マルクスの『階級闘争』がもつ特に重要な意義をもつ点（社会による生産手段の取得を、本書が初めて言明したという事情）を紹介する箇所であるが、そのことによって、「近代の労働者の社会主義が、様々な色合いをもった封建的、ブルジョア的、小ブルジョア的等々の、すべての社会主義とはっきり区別され、そしてまたユートピア的または原生的な労働者共産主義の混沌たる財貨共有制とも、きっぱり区別される命題が公式化されている。……」<sup>73</sup>と書いているところである。このようにその他の社会主義・共産主義との区別を意識して『宣言』のうち第III章のみが公表・再版されたと言ってよい。

マルティン・フントの見解も参考になる。「バルンシュタインが、修正主義者として現れる20年も前に（1879年の悪名高い三つ星論文のなかで）この把握の萌芽を主張していたときに、マルクスおよびエンゲルスは、「回状」等において、「われわれはこうしたたわ言すべてを1848年このかた大変よく知っている」と指摘して、バルンシュタイン、ヘビバルクおよびシュラムに反対した」。そして、「回状」において「マルクスおよびエンゲルスは「チューリッヒの3人の検閲官」の把握を『共産党宣言』において批判された「ドイツ的ないしは『真正』社会主義」と比較した」というのである。<sup>74</sup>その箇所にはこうある。

---

*Studies*, Vol. XXIX, No. 4, 1981, pp. 537-554を参照。

<sup>73</sup> エンゲルス「序文」『フランスにおける階級闘争』大月書店〔国民文庫〕、67ページ。

<sup>74</sup> Martin Hundt, *Zur Entwicklung der Parteiauffassungen von Marx und Engels in der Zeit des Bundes der Kommunisten, Bund der Kommunisten 1836-1852*, hrsg. v. Martin Hundt, Berlin 1988, S. 308（初出は *Beiträge zur Geschichte der Arbeiterbewegung*, 23. Jahrgang 1981, H. 4, S. 512-527. 拙訳「共産主義者同盟の時期におけるマルクスおよび

「彼らの社会主義的な実質についていえば、これにたいしては、すでに『[共産党]宣言』の「ドイツ社会主義または「真正」社会主義」の章にあますところのない批判がくわえられている。階級闘争が好ましからぬ「粗野な」現象だとして排除される場所では、社会主義の基礎としては、「真の人類愛」と「正義」にかんする空虚な美辞麗句とのほかにはなにも残らない。」<sup>75</sup>

こうした『評論』における部分再録に比べると、『レッド・リパブリカン』における英訳掲載は、連載予告記事における「名高い『ドイツ共産主義者の宣言』、ハーニーの〈まえがき〉における「ドイツの共産主義者のすべての党派によって採択された以下の『宣言』」および「ドイツの革命家たちのもっとも先進的な党派の諸計画および諸原則」といった言葉、また、掲載のつど付された「ドイツの共産主義」という欄の表題に見られるように、「大陸の諸社会主義」を紹介する一環という含みが当初からあったことが窺われる。

〔はしがき〕第6段落の削除は、そこで記されていた各国語への翻訳が、フランス語についてはハーニーが〈まえがき〉でその事情を述べているからというだけでなく、革命の勃発とその後の経過のために実現しなかったことによるであろう。

第IV章第1～7段落が削除されたのは、『評論』の部分再版で述べたと同様の革命による情勢の変化という事情があったであろうし、ドイツの運動の紹介という点で国際的な見地の箇所はそぐわないと判断されたのでであろう。なお、後者の点は、当時のハーニーの国際性の限界と捉えることができるかもしれない。

『レッド・リパブリカン』では、『宣言』最後の一句「万国のプロレタリア、統一せよ！」が、段落を切ろうとすれば可能な行頭の空白があるにもかかわらず、最後の段落に引き続き印刷されている。第IV章の大半が削除されたため、そのような扱いになったものと思われる。

#### IV マクファーレン／モートン問題の検討

ハワード・モートンという名前がヘレン・マクファーレンの筆名である可能性を初めて示唆したのは、先に述べたとおり、ショイエンであった。本節ではこの「マクファーレン／モートン問題」について簡単な検討を試みるが、その前に「ほんものの『ハワード・モートン』」問題について私見を示しておきたい。というのは、マクファーレンと同様、これまでなんらの情報もなかったハワード・モートンについて一つの事実を確定することが可能となるからである。そしてこの事実はマクファーレン／モートン問題の解決に資するからである。

##### 1. 「ほんものの『ハワード・モートン』」問題について

1964年のマリニチュヴァによる論文が最初と思われるが、『レッド・リパブリカン』の投書欄に

---

エンゲルスによる党把握の発展について」鹿児島大学法文学部紀要『経済学論集』第77号、2011年10月、133/134頁).

<sup>75</sup> MEW, Bd. 19, S. 164.

掲載された記事中の「ほんものの『ハワード・モートン』』という語をどのように理解すべきかという問題である。

### (1) ジョージ・ジョゼフ・マントル (George Joseph Mantle) の手紙

まず、当の投書そのものを見てみよう。『レッド・リパブリカン』1850年10月5日号の読者の投書欄に掲載されたマンチェスター在住のジョージ・ジョゼフ・マントル<sup>76</sup>の投書からの次のような興味深い記事である。

「G. J. マントル (マンチェスター) はこう書いている。すなわち、『レッド・リパブリカン』は大々的な成功を手に入れるためには宣伝することだけが必要であると信ずるし、『レッド・リパブリカン』が自身を最もよく宣伝していると結論づけられるので、私は以下のように私の友人たちの間で10シリング6ペンスを集めた。すなわち、ハワード・モートン、(ほんものの『ハワード・モートン』) 5シリング、ジョン・ナイト 2シリング6ペンス、J. H. Q. 1シリング、ジョージ・J. マントル夫人 2シリング。この金額は人がたくさん集まる場所の卓上に『レッド・リパブリカン』を置くのに充ててもらいたい。だから、私はこの出版物が人々に知れ渡るようにするため、マンチェスターではその販売部数を増やしたいと思っているし、私のこの拠金がなくなってしまう前に、より多くの額が——自主的に——提供されるであろうと信じている。」<sup>77</sup>

### (2) 「ほんものの『ハワード・モートン』』——従来の理解——

マントルの手紙からの抜粋の下線部「ほんものの『ハワード・モートン』』と書き加えられた語の理解が問題となる。従来は、『レッド・リパブリカン』に寄稿しているハワード・モートンとは別に本物のハワード・モートンがいることを示す証拠であると解釈されてきたように思われる。つまり、『レッド・リパブリカン』に寄稿しているハワード・モートンは筆名であり、本名は何らか別の人物であって、いわば偽のハワード・モートンであることを示す証拠であるとされてきたのである。マリニチュエヴァの見方とそれを踏襲する理解である<sup>78</sup>。マリニチュエヴァの解釈は種々に解せ

<sup>76</sup> このマントルとは、マリニチュエヴァ (См. Мариничева, М. П., «Red Republican» — печатный орган революционного чартизма. «Из истории марксизма и международного рабочего движения». Москва, 1964, стр. 527) および新メガ (MEGA<sup>2</sup>, III/4, Apparatus, S. 586) によれば、本節の後論で詳しく見る翌「1851年1月8日付マルクス宛のエンゲルスの手紙」において「当地にいるハーニーの友人」3名をマルクスに紹介しているうちの二番目、「小柄で果敢で短気な若者だが、その知的能力のほどは僕にはまだはつきりわからない」人物であるとされている。

<sup>77</sup> Notices to Correspondents, *The Red Republican*, No. 16. — Vol. I., Saturday, October 5, 1850, p. 125/II. 下線は橋本による。なお、原文は、G. J. MANTLE, Manchester, writes as follows — Believing that the *Red Republican* only wanted advertising to ensure its triumphant success, and concluding that it would best advertise itself, I have raised among my friends 10s. 6d. as follows, — Howard Morton, (the veritable “Howard Morton”) 5s., John Knight 2s. 6d., J. H. Q. 1s., Mrs. George J. Mantle 2s. This sum I intend to employ in placing the *Red Republican* upon the tables of popular resort. Thus bringing the publication under popular notice, in Manchester I hope to increase its circulation; and before my present funds are exhausted, I believe I shall be provided with more — *Sans sollicitation*.”

<sup>78</sup> このマリニチュエヴァの理解のわが国への最初の紹介は水田、前掲書、114/115頁によってなされた。そこには文献の挙示がなかった。本稿では、「マリニチュエヴァ論文」とは、Мариничева, М. П., «Red Republican» — печатный орган революционного чартизма. «Из истории марксизма и международного рабочего движения». Москва, 1964であり、「それを紹介した『カール・マルクス記念図書館季報』の小論文」とは、[Phyliss Bell?], *International Women's Year. Helen Macfarlane, Chartist and Marxist, Marx Memorial Library Quarterly Bulletin*, April and June 1975, pp. 3-6 [著者についてはD. ブラックの推定]であろうと推定した。

て分かりにくいところがあるように思われる。が、いずれにせよ、マントルが投書において、ハワード・モートンという名前を引用符で括ることによって、また「ほんものの」と付加することによって、『レッド・リパブリカン』に寄稿しているハワード・モートンとは別人のハワード・モートンがマンチェスターに在住しており、拠金してくれたことを強調している、とマリニチェヴァが理解していると読み取ってよいものである点については異論のないところであろう。

しかしながら、従来のこのような解釈は誤りであろう。というのは、ハワード・モートンが筆名であるかどうか、またそれがヘレン・マクファーレンの筆名であるかどうかという問題は別にして、「ほんものの『ハワード・モートン』」についての従来のこのマリニチェヴァのような解釈とは別の理解が成り立ち得るのを見逃しているからである。従来のような理解は、『レッド・リパブリカン』に寄稿しているハワード・モートンがヘレン・マクファーレンの筆名であるということの証拠を探し出そうとするあまり、的外れの誤った解釈をこのマントルの投書の「ほんものの『ハワード・モートン』」という部分に施していることから生じているのである。

### (3) 「ほんものの『ハワード・モートン』」についての本稿の理解

実際は次のような次第であったものと思われる。

マントルの投書に問題の一句「ほんものの『ハワード・モートン』」がなかった場合、『レッド・リパブリカン』の読者はおそらく同紙にすでに7点もの記事を寄せて健筆を奮っているハワード・モートンと、なんと同姓同名の人物がたまたまマンチェスターに住んでおり、その人物からマントルが募金を得たものと読むことになるであろう。マントルはそのような『レッド・リパブリカン』読者の受け取り方が生じ得ることをあらかじめ予想しており、そのような誤解を避けるために彼はそれに先回りして、彼が寄付を得たのはそのようなマンチェスターに別に在住する同紙寄稿者と同姓同名のハワード・モートンではなくて、まさに『レッド・リパブリカン』に寄稿しているハワード・モートンその人からお金を受け取ったのだということをはっきりと示そうとして、「ほんものの『ハワード・モートン』」と付け加えているのである。

もっと言えば、この箇所は、『レッド・リパブリカン』に寄稿しているハワード・モートンその人（そのモートンが筆名——例えばヘレン・マクファーレンの——であろうと、マクファーレンと別の、モートンが本名の人物であろうと、どちらでも構わない）がマントルの仲間において、実際に寄付してくれたのだということを知らせているのである。つまり、寄付を集めたマントルが、自分たちマンチェスター在住のチャーティストの仲間に『レッド・リパブリカン』にたびたび寄稿しているハワード・モートンその人（すなわち、「ほんものの『ハワード・モートン』」）。もしそれがマクファーレンの筆名であれば、ヘレン・マクファーレン本人）が属しているということを読者に伝え、さらに、その本人から募金さえ得たのだということを誇り、自慢しているのである。

このような理解が不自然なものでないことを別の方向から示そう。

上にはマントルの投書全体を掲げたので、その趣旨は明瞭であろう。投書の内容からは、マントル自身がチャーティストの一員であり、『レッド・リパブリカン』の支援者であることが分かる。同紙の発行のためにマンチェスターで周囲の友人らから募金し、同紙に送金しているわけである。

新聞発行のために募金をするほど新聞に対して協力的な人物が、もしハワード・モートンが筆名であったとして、その新聞であえて筆名で書いているのにはなんらかの理由があるわけであるのに、その新聞が隠していることをわざわざ暴き立てて、新聞にとって不都合な内容を記した投書を出すという、非協力的な、というよりもむしろ自身が支援している新聞に対して反対するような行動をとったりするものであろうか。つまり、通説の解釈に立てば、『レッド・リパブリカン』の支援者であるマントルが筆名であることを暴露する内容の手紙を書いたというおかしなことになるのである。そんなことはあり得ないであろう。

また、万一もしそのような内容の投書であったとしても、新聞にとって明かされてしまえばなんらかの差し障りが生じる可能性のあるそのような内容を、新聞編集者のハーニーが、たとえ読者からの手紙という形であっても、新聞にそのまま掲載したりするものであろうか。つまり、『レッド・リパブリカン』編集部が、事情あって本名を伏せて筆名で書いているその著者名を実は筆名であるとなぜわざわざ明らかにするようなことを読者の投書欄であえて行うであろうか？ そんなことはあり得ないであろう。

筆者がマリニチュエヴァ以来の通説の解釈に問題を感じるのには、推定のそもそも土台をなすはずの以上のような新聞の投書掲載の諸前提に対する理解を欠落させたまま、さらに推定を行っている点に疑問を抱くからである。

以上、「ほんものの『ハワード・モートン』」問題についての私見を示した。些事の詮索のように見えるかもしれない。しかし、以上の検討から生じる重要な結論は、『レッド・リパブリカン』に寄稿していたハワード・モートンが当時、マンチェスターあるいはその近郊に居住していたことが事実として認定されることである。従来解釈では何の手掛かりもなかったハワード・モートンについて、その重要な手掛かりの一つと言える居住地域が判明し確定されたのである。

## 2. マクファーレン/モートン問題について

### (1) クーニナの見方：従來說（ハワード・モートンはヘレン・マクファーレンの筆名である）

クーニナのマクファーレン/モートン問題についての見解は次のようである。

「『ハワード・モートン』という筆名に身を隠しているのはおそらく優れた女性ジャーナリストであるヘレン・マクファーレンであって、彼女は『共産党宣言』を英語に翻訳し、1850年の4月から6月に（彼女の名前で）『デモクラティック・レビュー』にいくつかの論説を書いた。同誌の7月号に「モートン」と署名された論説がはじめて掲載され、それ以来、「マクファーレン」と署名された論説はもはや掲載されなくなる。これら「二人の」執筆者の論説の内容の分析から結論してよいのは、彼らが同一人物であるということである。「マクファーレン」と署名された論説も「モートン」と署名された論説も、チャーティスト運動ならびにその運動の前に今存在している諸課題についての彼らの考え方および精神において、きわめてマルクスおよびエンゲルスの論文を思い起こさせるものがある。マルクスはヘレン・マクファーレンの論説を非常に評価した（「1851年2月23日付エンゲルス宛マルクスの手紙」）が、それに反してモートンの名前はマル

クスによってもエンゲルスによってもかつて言及されることがない。ヘレン・マクファーレンとモートンが同一人物であるという推論をアメリカの歴史家ショイエンも行っている。<sup>79</sup>

ショイエンの推定を継承し、マルクスおよびエンゲルスの言及等の点から補強している。

## (2) D. ブラックの見方：1850年半ばにマクファーレンはバーンリーに転居した

この間、D. ブラックはモートンの『レッド・リパブリカン』寄稿論説について、興味深い推定を行っていた。6～7月に掲載された3点についてはもっぱら首都ロンドンでの出来事を取り扱っているのに対して、8月以降の6点7論説はマンチェスターでの出来事を取り扱っている傾向がある、というのである<sup>80</sup>。

前項における「ほんものの『ハワード・モートン』」問題の検討によって、モートンが遅くとも9月にはマンチェスターないしはその周辺に居住していたことが事実として認められた。

このD. ブラックの推定に従えば、彼はモートンがマクファーレンの筆名であると前提して立論しているから、モートンすなわちマクファーレンが1850年の半ばまではロンドンに居住しており、7～8月頃にバーンリーに転居していたということになる。

## 3. マルクスによるマクファーレン評価の観点からの吟味

本稿では、従来説を、マルクスによるマクファーレン評価の観点からさらに補強してみたい。

ハワード・モートンがヘレン・マクファーレンの筆名であるのかどうかという問題を、先に見た1851年2月23日付のエンゲルス宛マルクスの手紙を基に考えてみるのである。

手紙でマルクスはマクファーレンを「彼〔ハーニー〕の小雑誌 (seine spoutsblättchen) への、実際に見識をもっていた、唯一の寄稿者 (Mitarbeiter)」、 「彼の新聞 (seine Blättchen) における稀にみる才能をもつ人物 (Rara avis)」と評している。ここで「小雑誌」と「新聞」とはいずれも単数である。手紙の日付からすれば、念頭にあるのは『レッド・リパブリカン』(およびその後継紙『フレンド・オブ・ザ・ピープル』)であろう。

また、Mitarbeiterは「協力者」とも「寄稿者」とも理解できる言葉である。モートンがマクファーレンの筆名であるとして、その執筆・翻訳論説リストを作成してみれば、次に掲げるBibliography of Helen Macfarlane (Howard Morton) の通りである。

『デモクラティック・レビュー』にマクファーレン名義で3回連載記事1点(3点分)、モートン名義で2点、『レッド・リパブリカン』にマクファーレン名義は無し(『宣言』訳は訳者名が記されなかった)、モートン名義で2回連載記事1点(2点分)を含めて合計10点、『フレンド・オブ・ザ・ピープル』にモートン名義で2回連載記事1点(2点分)ということになる。

もし対象となる新聞をマルクスの手紙の日付に近い『レッド・リパブリカン』と『フレンド・オブ・ザ・ピープル』に限るならば、マクファーレン名義の寄稿は1点もないということになる。

<sup>79</sup> В. Э. Кунина, Джордж Джулиан Гарни, Маркс и Энгельс и первые пролетарские революционеры, Москва, 1961, стр. 405-438, стр. 430, примечание 74, стр. 525 (独訳は W. Kunina, George Julian Harney, *Marx und Engels und die ersten proletarischen Revolutionäre*, Berlin 1965, S. 421-455, S. 447, Anmerkung 74, S. 549). 本稿は独訳から訳出。

<sup>80</sup> D. Black, *ibid.*, p. 43.

『共産党宣言』最初の英訳をめぐる諸問題

Bibliography of Helen Macfarlane (Howard Morton)

1	Helen Macfarlane	Democracy. Remarks on the Times, Apropos of Certain Passages in No. 1, of Thomas Carlyle's Latter-Day Pamphlets.	<i>The Democratic Review,</i>	Vol. I, No. 11, April, 1850,	pp. 422-425.
2	Helen Macfarlane	Democracy. Remarks on the Times, Apropos of Certain Passages in No. 1, of Thomas Carlyle's Latter-Day Pamphlets.	<i>The Democratic Review,</i>	Vol. I, No. 12, May, 1850,	pp. 449-453.
3	Helen Macfarlane	Democracy. Remarks on the Times, Apropos of Certain Passages in No. 1, of Thomas Carlyle's "Latter-Day Pamphlets."	<i>The Democratic Review,</i>	Vol. II, No. 1, June, 1850,	pp. 11-20.
4	Howard Morton	Intrigues of the Middle Class "Reformers."	<i>The Democratic Review,</i>	Vol. II, No. 2, July, 1850,	pp. 45-48.
5	Howard Morton	A Bird's Eye View of the Glorious British Constitution.	<i>The Democratic Review,</i>	Vol. II, No. 4, September, 1850,	pp. 121-125.
6	Howard Morton	Chartism in 1850.	<i>The Red Republican,</i>	No. 1. - Vol. I., Saturday, June 22, 1850,	pp. 2/III-3/II.
7	Howard Morton	The Red Flag in 1850.	<i>The Red Republican,</i>	No. 4. - Vol. I., Saturday, July 13, 1850,	pp. 26/III-27/III.
8	Howard Morton	"Fine Words (Household or Otherwise) Butter No Parsnips."	<i>The Red Republican,</i>	No. 5. - Vol. I., Saturday, July 20, 1850,	pp. 34/II-35/I.
9	Howard Morton	Middleclass-Dodges and Proletarian-Gullibility in 1850. "A Penny Monument to Sir Robert Peel !"	<i>The Red Republican,</i>	No. 7. - Vol. I., Saturday, August 3, 1850,	pp. 51/1-52/1.
10	Howard Morton	Democratic Organisation.	<i>The Red Republican,</i>	No. 9. - Vol. I., Saturday, August 17, 1850,	pp. 67/II-68/I.
11	Howard Morton	Proceedings of the Peace-at-Any-Price Middle-class Humbugs.	<i>The Red Republican,</i>	No. 13. - Vol. I., Saturday, September 14, 1850,	pp. 102/II-103/II.
12	Howard Morton	The "Morning Post" and the Woman Flogger.	<i>The Red Republican,</i>	No. 14. - Vol. I., Saturday, September 21, 1850,	p. 107/1-107/III.
13	Howard Morton	The Democratic and Social Republic.	<i>The Red Republican,</i>	No. 17. - Vol. I., Saturday, October 12, 1850,	pp. 131/1-132/II.
14	Howard Morton	Labour <i>versus</i> Capital. Two Chapters on Humbug — Chap. I	<i>The Red Republican,</i>	No. 20. - Vol. I., Saturday, November 2, 1850,	pp. 154/III-155/III.
15	Howard Morton	Labour <i>versus</i> Capital. Two Chapters on Humbug — Chap. II	<i>The Red Republican,</i>	No. 21. - Vol. I., Saturday, November 9, 1850,	pp. 162/III-163/II.
16	[Helen Macfarlane.]	Manifesto of the German Communist Party.	<i>The Red Republican,</i>	No. 21. - Vol. I., Saturday, November 9, 1850,	pp. 161/1-162/III.
17	[Helen Macfarlane.]	Manifesto of the German Communist Party.	<i>The Red Republican,</i>	No. 22. - Vol. I., Saturday, November 16, 1850,	pp. 170/III-172/1.
18	[Helen Macfarlane.]	Manifesto of the German Communist Party.	<i>The Red Republican,</i>	No. 23. - Vol. I., Saturday, November 23, 1850,	pp. 181/III-183/II.
19	[Helen Macfarlane.]	Manifesto of the German Communist Party.	<i>The Red Republican,</i>	No. 24. - Vol. I., Saturday, November 30, 1850,	pp. 189/1-190/III.
20	Howard Morton	Signs of the Times. Red-Stockings <i>versus</i> Lawn-Sleeves.	<i>The Friend of the People,</i>	No. 2.] Saturday, December 21, 1850,	pp. 10/III-11/II
21	Howard Morton	Signs of the Times. Red-Stockings <i>versus</i> Lawn-Sleeves.	<i>The Friend of the People,</i>	No. 3.] Saturday, December 28, 1850,	pp. 18/1-19/II

確かに『宣言』の英訳がマクファーレンによるものであるとマルクスに知らされていたとしても、その『宣言』英訳の分4回連載1点だけをもってして、彼の手紙にあるような高い評価となるであろうか。やはり、マルクスの手紙でのマクファーレンに対する評価は、ある程度の数の寄稿が前提となってなされているように思われる。とするならば、その内容に『宣言』からの影響が見られるモートンの記事は、他ならぬマクファーレンが書いたものと想定するのが妥当となるであろう。そして遅くとも新年宴会時点では、モートンという名はマクファーレンの筆名であるとマルクスおよびエンゲルスに知らされていたものと思われる。

以上の推定は、モートンがマクファーレンの筆名である可能性を補強し、その可能性を一層高くするものである。

## VI マクファーレン訳へのエンゲルスの関与<sup>81</sup>

### 1. クーニナらの従來說

翻訳作成の経緯については、ショイエンの仮説をもとに<sup>82</sup>翻訳作業はすでに1849年のうちに開始されていたとされていた<sup>83</sup>。

また、マクファーレンとマルクスおよびエンゲルスとの関係については、なんらかの判断を下し得るような資料が欠けている。それにもかかわらず、これまで、この英訳には彼らの助力、とりわけエンゲルスの助力があったとされていたのである。

その状況証拠はマクファーレンの側では、すでに見たように、彼女が当時、マンチェスターとほど遠からぬバーンリーに住んでいたことである。エンゲルスは1850年11月にマンチェスターへ転居したが、その後は、彼女が自らエンゲルスを訪れる余地が生じる。また、彼女は、エンゲルスが『共産党宣言』の研究のためにマンチェスターで組織した小さなチャーティストのグループの若干のメンバーと、結びつきをもっていたともみなされている。さらに、後のマルクスの手紙などから、ロンドンの共産主義者同盟中央指導部がドイツ語で発表したすべての資料を、マルクスから直接に受け取っていた非常にわずかなイギリス人のグループに入っていたとも推測されている。

他方、エンゲルスの側では、彼が1848年の春にバルメンで自ら『宣言』を英訳しようと試みたことと関わっている<sup>84</sup>。革命の展開は翻訳の完成のみならず、その草稿の保持をも許さなかったであろう。そのため、1850年には、彼自身よく知っていた翻訳者に対して、かつての翻訳にさいしての

<sup>81</sup> 本節の第1項および第2項は、行論の必要上、拙稿「『共産党宣言』普及史研究の成果」に既出の行文を一部改定して用いている。

<sup>82</sup> アンドレアスもクーニナもショイエンの所説に依拠している。

<sup>83</sup> 以下、従来の見解は、В. Э. Кунина: Об участии Энгельса в подготовке первого английского перевода “Манифеста Коммунистической партии”. // Институт Марксизма- Ленинизма при ЦК КПСС Научно-Информационный Бюллетень Сектора Произведений К. Маркса и Ф. Энгельса, №18, Москва 1970, стр. 47-53 に依る。

<sup>84</sup> エンゲルスは1848年4月25日にマルクスに宛てて次のように書いた。「僕は英訳に取り掛かっている。それは、僕が考えていたよりも難しい。だが、半分以上はもうできている。間もなく全部でき上がるだろう」*MEW*, Bd.27, S. 126.

経験を伝えるなどの援助を申し出ざるをえなかったはずだ、というのである。

このような助力の物証となっていたのは、すでに見た「訳者注記」の二つ目と三つ目およびハーニーによる〈まえがき〉である。「訳者注記」の二つ目のような言い回しは、訳者ではなしに、著者たちに由来するものであろう、また、三つ目の「訳者注記」で加えられるような、新しい政治勢力の配置の変化については、訳者が独断で記せるような内容ではないし、そもそもそのような注記の必要性自体、著者たち自身の口から出たものでなければならない、さらに、〈まえがき〉に見られる、異なる二つのフランス語訳が草稿の形で存在するという情報は、マルクスないしはエンゲルスから直接に得たものである、というのである。そして、1850年時点では、マルクスはまだそれほど英語に習熟していなかったことを勘案すれば、「訳者注記」の内容も含め、それらはすべてエンゲルスから得られた助力の一部と見なければならぬ、というのである。

それゆえ、これまでは、『宣言』英語版の翻訳について、その「テキストの準備においても、その出版の準備においても、エンゲルスは少なくとも専任の親切な助言者であった」とされていたのである。新メガの編集者たちもこの従來說を踏襲し、それを一層正確にしようとする方向で解説がなされていた<sup>85</sup>。

## 2. シュテークリによる従來說批判

だが、この間、このような従來說とは異なる見解が、シュテークリによって提出された。それは、『レッド・リパブリカン』での英訳の公表という出来事は、もっぱら1850年9月の共産主義者同盟の分裂によって生じたと見る立場からのものである。すなわち、公表の目的は、分離派からの非難の的となっていた『宣言』が、以前には分離派メンバー自身も支持していたこと、そしてそれを起草したのは同盟中央指導部多数派のマルクスとエンゲルスであったことを明らかにするところに置かれていた、というのである<sup>86</sup>。その他の諸点もここから以下のように解釈されることになる<sup>87</sup>。

まず、マクファーレンが翻訳に着手した時期に関わっては、『新ライン新聞。政治経済評論』第5・6合冊号への『宣言』第三章の再掲載の決定とほぼ前後して、エンゲルスが彼女に翻訳を依頼したと推測する。ここから訳文の出来映えも自ずと拙速であるとみなされることになる。また、マクファーレンが、同盟中央指導部によってドイツ語で発表された資料すべてを、マルクスから直接に渡されていたとまでは、後のマルクスの手紙のみをもって推測することはできないとされる。

「訳者注記」についても異なった解釈がなされる。二つ目の注記は「語調」にすぎず、著者の意

<sup>85</sup> Vgl. *MEGA*<sup>2</sup>, I/10, S. 1119/1120.

<sup>86</sup> この点について詳しくは、前掲の拙稿「恐慌と革命」のうち「B 正確な情勢分析への努力と共産主義者同盟の分裂」の項目(70-73頁)および前掲拙稿「J. G. エッカリウス「ロンドンにおける仕立て業」とマルクス」、223-227頁を参照。シュテークリは『宣言』の英訳掲載にのみ着目しているが、前記の脚注でも記したように、エッカリウス論文と同趣旨の論文の掲載や、エンゲルスの農民戦争の英訳掲載の模索もこの文脈の中にあるのを忘れてはならない。

<sup>87</sup> А. Э. Штекли: Левеллеры, исчезнувшие из текста. // Утопии и Социализм, Москва 1993, стр. 198-223 (初出はА. Э. Штекли: Энгельс и английский перевод «Коммунистического Манифеста» (1850). // История Социалистических Учений 1987, Москва 1987, стр. 3-24)

向を示す確証とはならないし、三つ目は、優れたジャーナリストであった訳者にとって、そのような情勢の変化はことさらマルクス、エンゲルスから伝えられずとも、自身で把握できたであろうと見るのである。また、従来説では注目されることのない一つ目の「注記」で述べられる用語変更は、マクファーレンの「勝手な判断」にはかならないとみなされるのである。

ハーニーの〈まえがき〉については、そもそもマルクスとエンゲルスはその内容に事前の同意は与えていなかったものと想定して、次のような解釈が対置される<sup>88</sup>。その内容は無論マルクスとエンゲルスから得られたものではない。その程度のものであればハーニーには二人以外に多くの情報源となる人々がいた。もしエンゲルス自身が関わっていたのなら、彼が認定して1888年に発行された英訳に自ら寄せた「序文」で、フランス語訳が1848年革命中に発行されたことを述べているが、これに反してハーニーはなぜ〈まえがき〉において、仏訳は発行されていないと述べなければならないのか。ハーニーはその事実を知らずにいたし、知らされもしなかったからだ、というのである。ハーニーはチャーティスト運動の指導者としてイギリスのみならずアメリカにおいても大きな権威をもっていた。マルクスとエンゲルスは1850年9月～11月当時、ハーニーの〈まえがき〉に多少の不正確さがあるにせよ、ともかくも彼の〈まえがき〉をともなう翻訳の掲載をこそ実現しなければならないきわめて重大な状況に置かれていた、というのである。

マクファーレンの翻訳そのものについても、テンサイ (Runkelrübe) および火酒 (Schnaps) の訳語がイギリス風に肉屋の肉 (butcher's meat) および穀物 (corn) と変更された点に異議が唱えられている。また、マクファーレンの英訳では、第三章第3節「批判的・ユートピア的社会主义および共産主義」の冒頭段落、「われわれはここでは、すべての近代の大革命においてプロレタリアートの諸要求を表明した文献 (バブーフらの諸著作) については述べない」<sup>89</sup>という章句が、誤った理解にもとづいて翻訳されているとする。英訳はこうである。「われわれはここでは、すべての、近代の大革命において、プロレタリアートの諸要求を表明した文献、例えばレヴェラーズのパンフレットやバブーフらの諸著作については述べない」。ドイツ語本文と異なり、例示に「レヴェラーズのパンフレット」が付け加えられている。だが、マルクスとエンゲルスがここで「近代」と言う場合、それは「バブーフの陰謀から1848年までの半世紀」であって、「レヴェラーズのパンフレットからまる二世紀を経る」ものではありえない<sup>90</sup>。また、1850年当時、エンゲルスはレヴェラーズに高い評価を与えており、それをバブーフと一緒にしてしまえば、レヴェラーズが「反動的」ということにならないか。したがって、レヴェラーズのパンフレットの追加はマクファーレンの「勝

<sup>88</sup> これと関連して、〈まえがき〉の最初の一文中、The following Manifesto, which has since been adopted by all fractions of German Communists のクーニナによる訳文「すでにドイツの共産主義者たちの組織すべてによって承認された以下の『宣言』は」が、シュテークリによって問題とされている。彼によれば、このような訳文では、過去ではなく現在の状況を、それも明るい調子で語ることになり、「章句の意義がほかされ」た、ニュアンスを伝えぬ誤訳とされる。シュテークリは次の点に〈まえがき〉の意義を見ようとしているようである。すなわち、まず同盟の分裂という大状況を念頭に置いたうえで、現在分離派によって非難されている『宣言』も過去には彼らも含めて賛同・採択されたことを明らかにし、彼らの非難の是非を読者自身が決するためにも翻訳が発表される、という点である。

<sup>89</sup> MEW, Bd.4, S.489.

<sup>90</sup> シュテークリはむしろ日本語で言うところの「現代」という理解に立っているであろう。

手な判断」なのではないか、ととらえるのである。<sup>91</sup>

従來說へのこのような異論には種々の誤解も混入しているように思われる。が、いずれにせよ、『レッド・リパブリカン』紙掲載の英訳について、さらなる検討が必要となっていることは言うまでもない。

### 3. エンゲルスの関与について

本稿では、通説とは異なって、マクファーレン訳にエンゲルスはほとんど関与していなかったのではないかとする立場から推論を試みてみよう。

従來說には種々の論点があるが、立論の便宜上、『レッド・リパブリカン』への掲載直前から、時間的に遡行して見ることにする。

第一に、エンゲルスがマンチェスターに転居した後は、マンチェスター近郊のバーンリーに住むマクファーレンへの翻訳上の助言が容易であったという見方である。

事実を見れば、翻訳掲載の開始は11月9日からであった。その一週間前の11月2日付の号には連載予告が掲載された。遅くともこの時点までには訳稿全体が仕上がっていたものと考えべきであろう。確かに4回連載であったから、1回ごとの訳稿が前週に仕上がったという可能性を排除することはできないが、翻訳全部が出来上がってからそれを4分したものであろう。

エンゲルスのマンチェスター転居は11月中であった。マンチェスターにおいてエンゲルスがマクファーレンに直接助言する時間的余裕はほとんどなかったであろう。

なるほど手紙による助言もあり得る。しかしながら、エンゲルスは12月16日付のハーニーからの手紙によって初めて、ファーストネームのヘレンを付けなければならないことを含め、彼女の宛先を知るのである。したがって、12月16日以前に、エンゲルスが手紙で助言することはできなかったと考えるのが自然である。ハーニーを介しての助言という可能性は排除できないが、翻訳に際しての助言が第三者を介してなされることはわかには想定し難いものである。

エンゲルスがマクファーレンの宛名を12月16日以前には知らなかったとすれば、バーンリーに転居した彼女にまだロンドンにいるエンゲルスが手紙をもって助言を与えた可能性をも排除するであろう。

---

<sup>91</sup> シュテークリが1850年当時エンゲルスはレヴェラーズについて高い評価を与えているというのは次のような事情によるものであろう。すなわち、「エンゲルスは、50年4月5日の友愛民主主義者協会主催のロベスピエール生誕記念祝賀会において、イギリス人は17世紀のイギリス革命におけるレヴェラーズの革命的伝統に生きよと演説し……チャーティストの革命的奮起を促した」（古賀秀男「十時間労働法問題」『現代の理論』No. 144, 現代の理論社, 1976年1月, 120頁）。しかし、古賀氏も述べるように、このようなレヴェラーズへの高い評価はマルクスおよびエンゲルスの情勢評価の変化以前のものであるという点に注意が必要であろう。そして、レヴェラーズについてのエンゲルスの本来の評価に関しては、後の文献ではあるが、彼の『ユートピアから科学への社会主義の発展』（また、その源泉である『反デューリング論』の該当箇所）に注目すべきである。そのI、第4段落では、エンゲルス自身がバブーフと並べて「イギリス大革命におけるレヴェラーズ」を禁欲的な共産主義に含めている。1850年の時点でも本来はそのような評価であったとするならば、英訳への「レヴェラーズのパンフレット」の追加は、エンゲルスの考え方に沿うものであって、必ずしもマクファーレンの「勝手な判断」とばかりは言えなくなるであろう。

第二に、従来説では、エンゲルスはマンチェスターでチャーティストの若手のメンバーと『共産党宣言』を論じ合うための定期的な会合を組織したが、マクファーレンはこのメンバーと結び付きをもっていたとされる。確かに本稿ですでに論証した通り、マントルの投書にある「ほんものの『ハワード・モートン』」がマクファーレンであるとするならば、このような結びつきがあったことは事実である。しかし、このメンバーをエンゲルスが知り、彼らに対して何らかの影響をもち始めるのは、早くとも1851年1月4日以降のことである。この日の朝にハーニーがエンゲルスに宛てて書いた手紙<sup>92</sup>によってキャメロンとマントルの宛先をエンゲルスは初めて知ることになるからである。

その後、彼らとの一定の面識を得て、エンゲルスは1851年1月8日に次のような手紙をマルクスに宛てて書くのである。

「当地にいるハーニーの友人のうち一人は恐ろしく気が長くて長話の尽きない退屈なスコットランド人であり、もう一人は小柄で果敢で短気な若者だが、その知的能力のほどは僕にはまだはっきりわからない。三人めの、ハーニーが僕に話したことの無い、ロバートソンというのは、僕にはずばぬけていちばん分別がありそうに思われる。この連中とは、小さなクラブをつくるとか定期的な会合を組織するとかして、いっしょに『宣言』を論じ合ってみようと思っている。<sup>93</sup>

また、このマルクス宛手紙を書く前にすでにエンゲルスはこの三人のチャーティストと会っているわけだが、それはそれほど前のことではないことが、「1851年1月11日のエンゲルス宛キャメロンの手紙」から分かる。ハーニーが、本来はキャメロンに宛てるべき『フレンド・オブ・ザ・ピープル』がいくつか入った小包をエンゲルス宛に送ってきたようであり、その旨エンゲルスがキャメロンにメモを届けたことに対する返事のようなものである。その内容と書き振りからは両者が多くてもまだ数回しか会っていないことが窺われる。

その後、マントルからは1851年2月にエンゲルスに宛てて短い手紙が来ている<sup>94</sup>。エンゲルスが手紙の宛名のある第4面にインクで「マンチェスター、51年2月。G. J. マントル」とメモ書きしており<sup>95</sup>、さらに手紙に年月日はないが「火曜日正午」とあるところから、4日、11日、18日、25日のいずれかの日になる。

これら一連の手紙からは、エンゲルスがマンチェスターに住むハーニーの知人たち——少なくともチャーティストの支援者であるとみてよいものと思われるが——と「小さなクラブをつくるとか

<sup>92</sup> *The Harney Papers*, L. 261, p. 258. このハーニーの手紙は「1850年12月4日」と日付が記されていた。そのため『ハーニー・ペーパーズ』の編者らは1850年12月4日の位置に収録した。しかし、新メガでは詳論は無いもの手紙の内容から1851年1月4日の誤記であるとの判断を下している。ハーニーがおそらく年月が改まったのを失念し、誤って前年のままの年次で1850年12月4日付と記したというのである (*MEGA*<sup>2</sup>, III/4, *Apparat*, S. 809)。手紙の日付部分には「土曜朝」と曜日も併記されており、それを手掛かりとすればやはり1851年1月4日付とするのは妥当であろう。1850年12月4日は水曜日だからである。

<sup>93</sup> 「1851年1月8日付マルクス宛エンゲルスの手紙」*MEGA*<sup>2</sup>, III/4, S. 12; *MEW*, Bd. 27, S. 164. 下線は橋本による。なお、新メガによれば、この三人のうち最初の人物はJ. M. キャメロンであり、三人目はおそらくW. B. ロビンソンのことと思われるとしている (*MEGA*<sup>2</sup>, III/4, *Apparat*, S. 586)。

<sup>94</sup> *MEGA*<sup>2</sup>, III/4, S. 321.

<sup>95</sup> *Ibid.*, *Apparat*, S. 839.

定期的な会合を組織するとかして、いっしょに『宣言』を論じ合ってみよう」と思うようになったのは1851年になってからのことであって、それ以前に1850年中にそのような結びつきをもつということはなかったことが分かる。つまり、彼らを通じてマクファーレンに『宣言』翻訳に際しての助言を与えることはできなかったのである。

『宣言』を論じ合う定期的な会合を組織する意図をマルクスに述べた時点ではすでに『レッド・リパブリカン』に掲載されたマクファーレンの英訳が存在しており、それあればこそその企図なのである。むしろ、エンゲルスは、この英訳を読み、そこにいくつかの不備を見出して、それら不十分な点についてこの会合において指摘し、『宣言』の意味内容を、マクファーレンも含めて彼らにより正確に理解させようとしたものと見ることもできるのではなかろうか。

第三に、通説では、1848年中に翻訳が開始されていたと見られている。その根拠となるのは、英訳掲載に先立つ1850年中のモートンの諸論説には『宣言』の影響と考えられる多くの箇所が見出され、その前提として、前年の1849年におけるマルクスないしはエンゲルスからの『宣言』の入手と、その読了が想定されるのであろう。

しかし、『宣言』の入手は、必ずしも直接にマルクスないしはエンゲルスからだけとは限らない。すでにロンドン・ドイツ人共産主義労働者教育協会のメンバーとなっていた『レッド・リパブリカン』の編集長ハーニーからでも可能である<sup>96</sup>。また、マクファーレンが『宣言』を読んだにせよ、それが必ずしもその翻訳を前提としたものであるとは限らないのではなかろうか。

なるほど翻訳が、マクファーレンもエンゲルスも伴にロンドンにいる早い時期に始められていれば、マクファーレンはロンドンにおいてエンゲルスから助言を受けることができたであろう。しかし、ロンドンでマクファーレンとエンゲルスが直接顔を合わせて助言がなされたとするならば、先に訳文の特徴として指摘した Tauschwerth を market value と訳したり、demokratische Parteien を revolutionary parties と訳したりするような誤りは、その時点で指摘され、訳文に残ることはなかったのではなかろうか。また、それだけ長期間エンゲルスと接していたならば、マクファーレンのキリスト教色はかなり払拭され、あれほどの形では残らなかったのではなかろうか。

以上、マクファーレンとエンゲルス両者がロンドンにあった時期にも、マクファーレンがマン

<sup>96</sup> そもそも『宣言』の表紙に記載された発行母体はこの協会である。ハーニーは当時すでにロンドン・ドイツ人共産主義労働者教育協会の会員となっていた。浜林氏はハーニーの協会加入時期を「1846年2月ごろ」とされている（同氏、前掲書、144頁）が、「1846年2月24日」と日付確定することができる。マックス・ネットラウがロンドン・ドイツ人共産主義労働者教育協会の議事録から自身の研究のために作成した抜粋がアムステルダム社会史国際研究所に残されている。その1846年2月24日の項にはハーニー（Harney, Harni）の名が見出される。「レーマン（Lehmann）あるいはシュラムによって提案されたハーニー（Harney, Harni）の入会」と抜粋されている（Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis [Amsterdam] Archiv M. Nettelau 344 Dokumente betr. CABV und Weitling 1845, Mappe 1, Fasz. 1. 1, S. 52）。したがって、この日の会議でハーニーの入会が審議され承認されたことが分かる。ちなみに、『ハーニー・ペーパーズ』には伝承されたマルクスおよびエンゲルスとハーニーとの往復書簡が収録されている。その最初のもは伝承されていない1846年3月5日付のエンゲルスの手紙への30日付の返信（Black / Black eds., *ibid.*, pp. 239-245. なお、浜林氏がこの手紙の日付を「10日」[同氏、前掲書、139/140頁]としているのは誤記であろう）であるから、1843年の秋のエンゲルスとの出会い以降、ハーニーによる国際的な連絡組織フラタernal・デモクラートの創設を機に1845年8月頃から1846年の2～3月頃にかけて彼らの連携が一層緊密になっていたものと思われる。

チェスター近郊のバーンリーに転居し、エンゲルスがロンドンにまだ残っていた時期にも、そしてエンゲルスがマンチェスターに転居した後の時期にも、1850年12月までは両者の間に結び付きはなかったものと推定できるのである。

そうであるとすれば、エンゲルスがマクファーレンと直接に『宣言』の英訳についてやり取りするということはあるまいであろう。したがって、『レッド・リパブリカン』に掲載された『宣言』最初の英訳に対してなされたエンゲルスによる助力は、たとえあったにしても、せいぜいのところハーニーとの間でわずかのものがなされたといった可能性しか残らないものと結論付けてよいのではなかろうか。

さらに、マルクスおよびエンゲルスは、早くとも1850年6月以降に『レッド・リパブリカン』に『宣言』の英訳が掲載されることになる種々の経緯の中でマクファーレンを知ったという可能性さえ引き出し得るのではなかろうか<sup>97</sup>。

## Ⅶ マクファーレン訳の影響

マクファーレン訳のイギリスにおける影響を示す史料2点がある<sup>98</sup>。1851年に、新聞および雑誌で『宣言』から二つの章句が引用されたのである。新聞は『タイムズ (The Times)』であり、その1851年9月2日付の社説 (leading article; editorial) において<sup>99</sup>。雑誌は同年同月の『クォーターリー・レビュー (The Quarterly Review)』であり、「革命文献」のタイトルをもつ項目において、『タイムズ』の社説を引用し解説する形であった<sup>100</sup>。

それらはどのような文脈で引用されたのか、その引用の特徴を確認し、『宣言』最初の英訳の影響にどのような特徴が見られるかも確認しておく必要がある。しかし、それらの立ち入った検討は他日に期し、本稿では、それらの検討の前提となるテキスト自体を確認し、簡単なコメントを付すに留める。というのは、アンドレアスの書誌はフランス語で書かれているから、両史料についての記載も『タイムズ』と『クォーターリー・レビュー』とが用いる英語ではない。また、その『宣言』からの引用箇所も旧メガ収録の原独文に依っており、マクファーレンの英訳の該当箇所を直接指示するものではない。二つの新聞・雑誌を実検することがたやすく、マクファーレンの英訳をも参看すれば特に問題はない。が、しかし、いずれが欠けても要領を得ぬ感が残る。本節の目的はさしあたりこの憾みを解消するところにあるからである<sup>101</sup>。

<sup>97</sup> あるいは、もう少し早く、1850年4～6月の『デモクラティック・レビュー』におけるマクファーレン名義のカーライル批判の連載論説をきっかけとして、彼らは彼女に注目するようになったのかもしれない。

<sup>98</sup> Andréas, *ibid.*, Bibliographie n° 26 et n° 27, p. 29.

<sup>99</sup> *The Times*, Tuesday, September 2, 1851, p. 4/V.

<sup>100</sup> *The Quarterly Review*, LXXXIX (September 1851), p. 523.

<sup>101</sup> そのため、当該引用箇所を本文においては行論の便宜から邦訳でかかげたものの、脚注において『タイムズ』の二つの引用文全体を掲げ、続けてマクファーレンの英訳から相違する箇所を示し、そのオリジナルのみならず新メガの該当頁をも付すこととした。また『クォーターリー・レビュー』の再引用に『タイムズ』からの相違のある場合はそれをも付記した。なお、1888年のエンゲルス校閲の英訳〔英語版『著作集』の該当頁数

『タイムズ』で引用される背景はこうである。現在、国民の教育に関する論議が盛んになされており、激しい論争さえ生じている。しかし、実はそれを台無しにしてしまうような恐るべき害悪が存在している。それはとりわけ労働階級 (the working classes) の考え方に影響を与える「貧者の文献 (the Literature of the Poor)」である。それがどのようなものなのか、その内容の恐るべきことを知れば、その影響力に対処するため、国民教育に関してこれまで行われてきた論争を終わらせてしまうのではないか。それを期待して、一例を示すために、現在宣伝にこれ努められているそうした諸理論のうち、手許にあるものからいくつかを引用する、というのである。『宣言』からの二つの引用も、プルードンの『所有とは何か』からの所有とは盗みであるという周知の文言と同様、著者名を挙げずに引用されている。

この二つの引用はいずれも『宣言』第Ⅱ章からである。一つ目は私的所有の廃止を述べた箇所であり、二つ目は婦人共有制に関わる箇所である。まず『宣言』から引用された章句の邦訳テキストを掲げる。

1) 「諸君は、われわれが私的所有を廃棄しようとしていることに驚いている。しかし、諸君の現存の社会においては、私的所有はその成員の10分の9にとっては廃棄されている。私的所有が存在するのは、まさに、それが10分の9にとって存在しないことによってである。こうして諸君は、われわれが社会の大多数の無所有を必要条件として前提する所有を廃棄しようとしていることを、非難するのである。

一言で言えば、諸君は、われわれが諸君の所有を廃棄しようとしていると非難するのである。たしかに、われわれはそうしようと思っている。」<sup>102</sup>

2) 「そのうえに、共産主義者のいわゆる公認の婦人共有制についてのわがブルジョアたちの高潔なおどろきほど、笑うべきものはない。共産主義者は婦人共有制を取り入れる必要はない、それはほとんどつねに存在していたのである。

わがブルジョアたちは、公認の売春制度のことはまったく問わないとしても、彼らのプロレタリアたちの妻や娘を自由にすることで満足せずに、彼らの妻を互いに誘惑しあうことを最高の楽しみとしている。」<sup>103</sup>

を併記]・1848年の初版23頁本の該当頁数をも示した。

<sup>102</sup> 前掲、服部訳、76頁。原文は以下の通り（下線は橋本による）。You reproach us, then, that we aim at the abolition of a species of property (i.e., private property) which involves as a necessary condition the absence of all property for the immense majority of society. In a word, you reproach us that we aim at the destruction of your property. This is precisely what we aim at. (*The Times*, Tuesday, September 2, 1851, p. 4/V. 下線部はそれぞれ1) property (i.e., private property) < property ; 2) as a necessary condition <, as a necessary condition, ; 4) your < YOUR ; 5) This < That [*The Red Republican*, p. 182/I; *MEGA*<sup>2</sup> I/10, S. 617]. *The Quarterly Review*, LXXXIX (September 1851), p. 523 [その *The Times* との相違は、3) In a word, > In a word]. 1888, p. 18; *MECW*, vol. 6, p. 500. 1848, S. 14). なお、3) から *The Quarterly Review* が *The Times* の孫引きと分るのではなからうか。

<sup>103</sup> 服部訳、同上書、80頁〔Weib は、古典叢書版の訳語「女性」ではなく、文庫版の「婦人」としてある〕。原文は以下の通り（下線は橋本による）。We do not require to introduce community of women; it has always existed. Your middle-class gentry are not satisfied with having the wives and daughters of their wages-slaves at their disposal – not to mention the innumerable public prostitutes – but they take a particular pleasure in seducing each other's wives. Middle-class marriage is, in reality, a community of wives. (*The Times*, *ibid.* 下線部はそれぞれ 1) women; <

見られる通り、前者は、後の『資本論』の用語で言えば<sup>104</sup>、いわゆる「商品生産の所有法則の資本主義的取得法則への転換」と呼ばれる事柄を前提にしたうえで、資本主義的取得に対する批判である。資本主義社会においては、当初、自己労働に基づくかに思われた所有権の根拠は失われている。実際には、資本を所有することは、労働者の提供する不払い労働を取得する権利となっていることを述べているのである。

『タイムズ』では、この二つの取得（所有）を混同して、『宣言』の文脈を内在的に理解せずに、ただ単に批判するために引用されている。その後も一般にマルクスの所有批判のこの要点は十分理解されずにいる。

後者の婦人共有制についての文言は、当時のブルジョアジーの二重基準<sup>105</sup>に対して皮肉混じりに逆ネジをくравせている箇所である。

私的所有廃止および上記の事情を伴う“婦人共有制”の主張に対する『タイムズ』による『宣言』の二つの箇所を引用しての反論の姿勢は、いずれも、文脈を無視し、立論を歪曲して非難するその後のやり方の典型をなすものといつてよからう。そのような立場からの批判はその後も跡を絶たないものであっただけに、『宣言』公刊の当初から、このような『宣言』の私的所有批判の論理および婦人解放論に対する典型的な反論がいち早く存在していたのはまことに興味深い。

## お わ り に

『共産党宣言』は、現在、『資本論』とともにカール・マルクスの主著の一つと受け止められている。しかしながら、本来、『共産党宣言』は1848年2月に共産主義者同盟というもっぱら手工業職人・労働者を主な構成員とする秘密結社の綱領として無署名で発表された文書である。当時の同盟の規約によれば、組織の綱領としてはそもそも1848年のただ1年間だけ有効である旨、定められていた。そのような性格をもつ『宣言』が、今では広く、K.マルクスの起草した文書として、また社会科学上の一古典として知られ、読みつがれている。

当初、無署名で発表された『共産党宣言』が、どのような経緯をたどってマルクスの起草であるとして一般に認知されるようになったのか。この問題は、『宣言』の起草者名の普及過程を追跡するという課題になる。

women, ; 2) Your middle-class < Your Middle-class ; 3) their wages-slaves < their Wages-slaves ; 4) their disposal < their disposal, ; 5) prostitutes < prostitutes, ; 6) , in reality, < in reality [*The Red Republican*, p. 182/III; *MEGA*<sup>2</sup> I/10, S. 619]. *The Quarterly Review*, *ibid.* [その *The Times* との相違は、 1) it has always existed. > *it has always existed* ; 2) Middle-class marriage is, in reality, a community of wives. > *Middle-class marriage is, in reality, a community of wives.*]. 1888, p. 20; *MECW*, *ibid.*, p. 502. 1848, *ibid.*).

<sup>104</sup> 同様に後の『資本論』の用語で言えば、「資本家的」取得と「個人的」取得との区別の問題と言ってもよい。例えば、「資本家的」取得と「個人的」取得とは……物質的富の取得であれ、まったく別のことがらである」(*MEW*, Bd. 23, S. 408, Anm. 108)と述べている箇所を参照。

<sup>105</sup> 19世紀イギリスのこうした側面については、さしあたり『共産主義者宣言』（太田出版、1993年）の訳者である金塚貞氏の邦訳になるスティーヴン・マークス『もう一つのヴィクトリア時代 性と享楽の英国裏面史』（中公文庫）を参照。

1917年のロシア革命以降、とりわけ第二次世界大戦末頃から東西冷戦体制が成立し、1989-91年に旧東欧諸国が崩壊する以前は、『共産党宣言』の著者がマルクス、エンゲルスであることはおそらく常識に属していた。そうであるのに、『宣言』の起草者名の普及史を問うのはなぜなのかをわかりに確認しておこう。

一般に、思想・著作を捉えるには、ただ単にその理論のみならず、それに伴う運動と制度の諸要因もまた重要である。『宣言』の起草者名の普及について歴史的批判的に追跡する場合には、それぞれの時期により、最も著しい影響を与える要因が異なっている。

20世紀について言えば、もちろん運動を前提しはするものの、制度が最も重要な要因である。1917年のロシア革命以来のソヴィエト連邦の成立、第二次世界大戦後の東欧圏の形成、中国の「新民主主義革命」後の状況を見れば明瞭であろう。

それに対して、19世紀の60年代以降は運動の要因が大きな影響を与えている。1864年の国際労働者協会の創立、そして、この組織が一定の影響を持った1871年パリ・コミュンに至る状況である。また、それに先立つ19世紀の50年代半ばは、イギリスで開催された労働者議会にマルクスはその名誉議員として決定文書に副署を求められるなど、すでに一定の地歩を占めている<sup>106</sup>。

起草者名の周知という点では、それ以前の時期が、まだ詳らかになっていないと言ってよい。したがって、1848年2月の『宣言』の発行以降、特に1850年代前半についてこそ検討する必要があるわけである。本稿ではその第一年次1850年の最初の英訳を見たのである。

〔付記〕本稿は2012年度科学研究費補助金・基盤研究(C)研究課題名「『共産党宣言』の起草者名の普及史」(課題番号21530182)の研究成果の一部である。

---

<sup>106</sup> Vgl. Wolfgang Meiser, *Soziale Programmatik in der Arbeiterbewegung Mitte der fünfziger Jahre des 19. Jahrhunderts, Alternativen denken. Kritisch-emanzipatorische Gesellschaftstheorien als Reflex auf die soziale Frage in der bürgerlichen Gesellschaft (vom Sozialismus vor Marx bis zur Theologie der Befreiung)*, Berlin 1991, S. 72-74 [拙訳「1850年代半ばの労働運動における社会綱領」鹿兒島大学経済学会『経済学論集』第74号、2010年3月、127-130頁]。